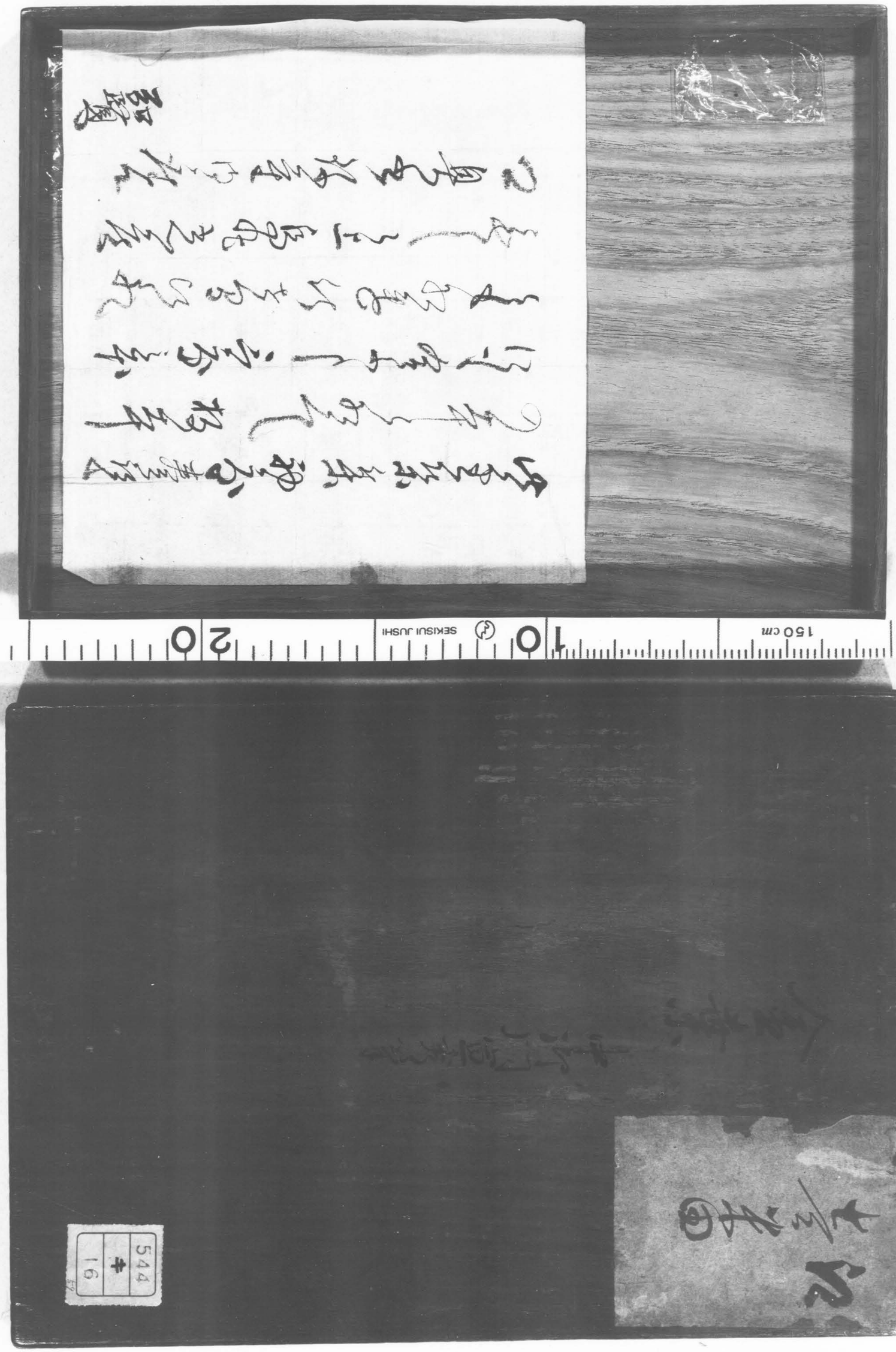
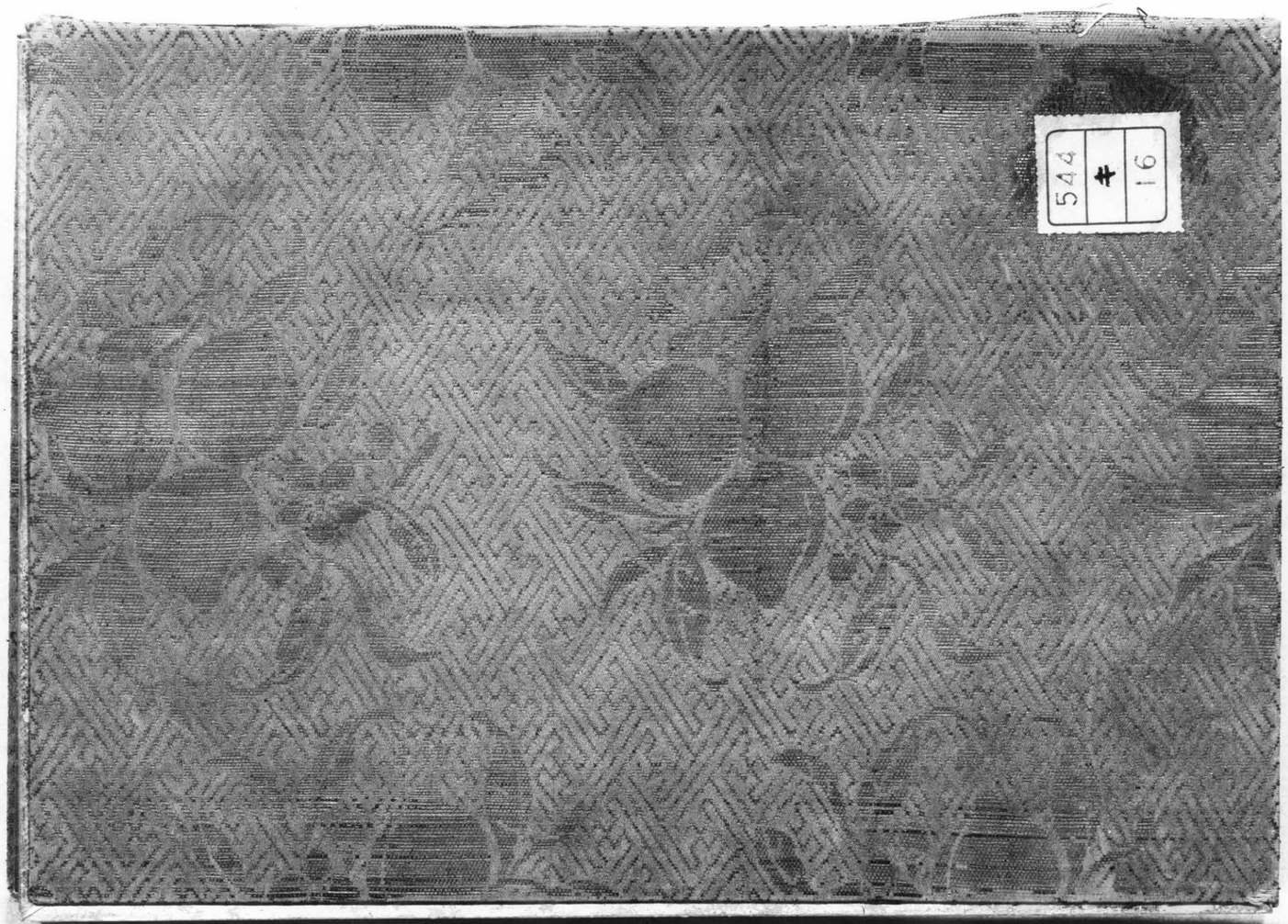


544
#
16


544
#
16

東京帝國大學圖書
昭和 24. 3. 19
182159

金葉和歌集第一

春部

堀川院御時百首哥めしけるによめる
立といふこゝろをよめる

修理大夫顕季

うちなびき春はきにけり山河の岩まのこほりけふやとくらむ

源俊頼朝臣

返すせよりつて道あまりに人の立かへる梅や春の初春

春宮大夫公實

春立て梢にきえぬ白雪はまだきにさける花かとぞみる

皇后宮肥後

氷ゐしかの谷川の岩まをわけて水とゞりや春立ぬらん

春従東来といへることをよめる

覚雅法師

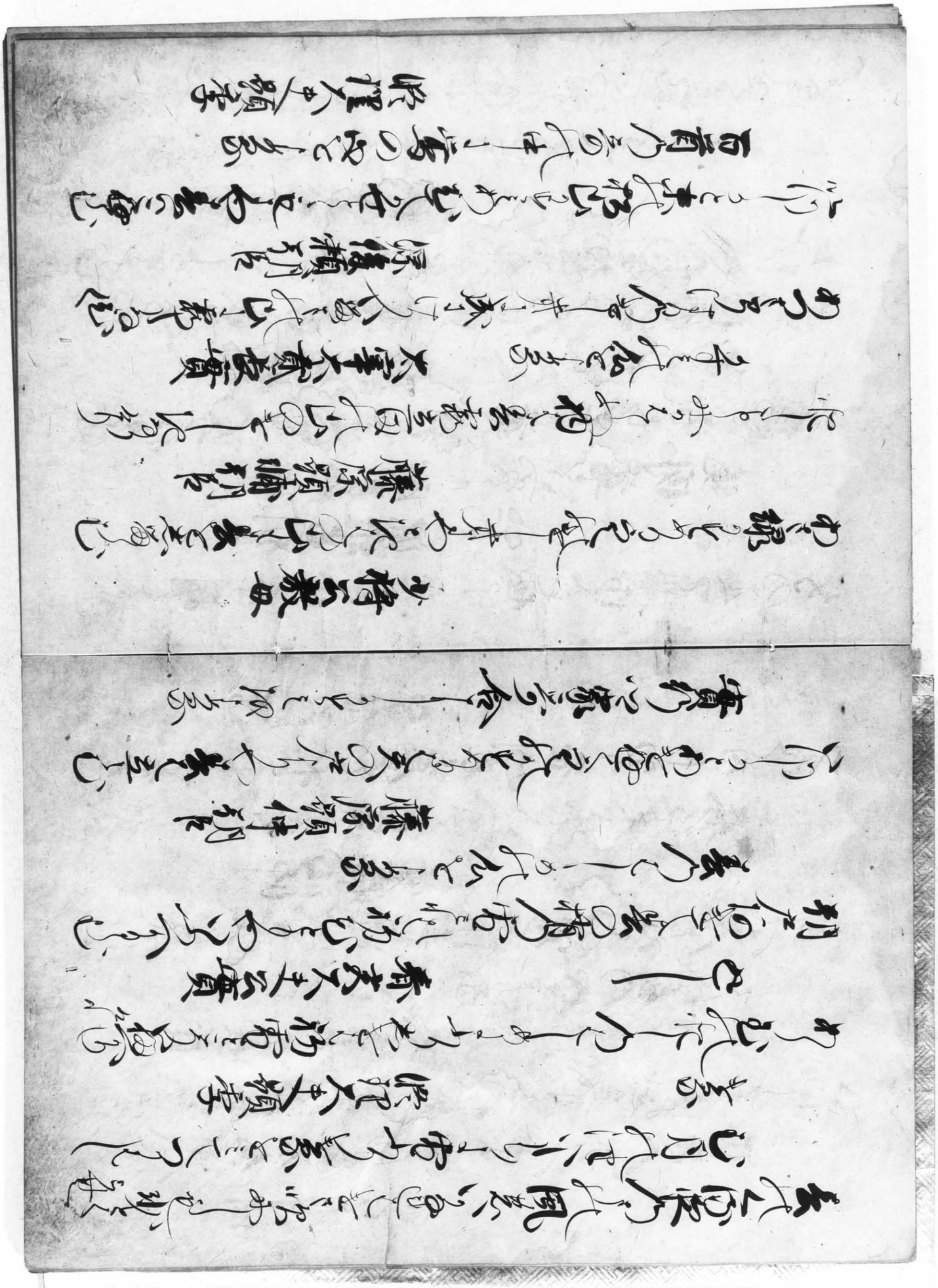
こちくるものゝ霞と共に立ていけの水のみの春風ぞ吹く

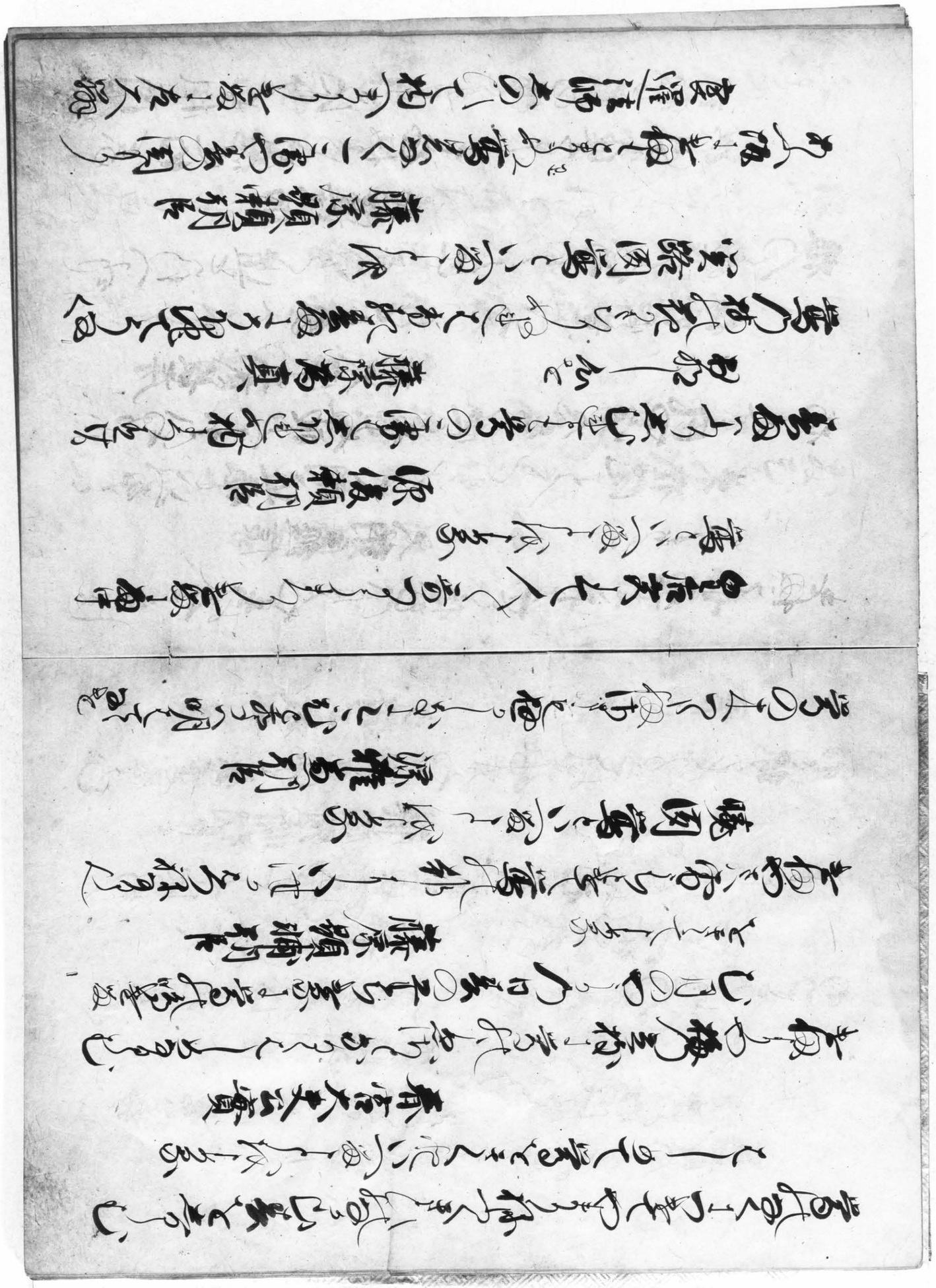
太宰大貳長實

いつしかと春のきたるしるしにはその原かすみかゝれり

百首の哥の中に春の心を人にかはりてよめる

前斎宮内侍





經頼の家の梅さうさくりまして門
徒白子庵にて梅をうゑ給ふ
宴法師

梅のとをれわかれのいとこうゐの道とへかへり
梅も匂ふ薫といへばこしとある
前太宰大貳長房

梅のえに風の吹人を恨の花と世にふるかな
朱雀院に人とまいりて閑庭梅といへること
とある
大納言經信

梅ゑ見ることをりせこ梅もひらやを見せ
梅花散水といへばまとある
源俊頼朝臣

梅の花の散ぬるとしをぬるまてやせにとまる
道雅中宮の合に梅花とある
藤原義孝朝臣

しりうゐのをいと梅と梅も水にいもこうらうとうし
梅花とある
源忠季

限りてしりいへりと梅花のうとは梅よのこせう四梅
四日門とある
大中臣公長

うすの花はいとこう梅ゑ梅のしをいかるる

百首の中に五月雨をよめる

源俊頼朝臣

さすらへの雲とまがふ橋うつてきぬぎぬ池の花ぞあやめる

五月雨をよめる　大納言道房

長雨立くるとも姫小松ひくまの〻つゆ和ときにけり

柳糸随風といふことを

院御製

風あけて柳はいとをくりかけるをくるつゆをもあるみ

百首の中に柳をよめる

春宮大夫公實

柳をくしきに吹くる風にまつ見けり長柳のいと

鬼岸柳をよめる　源雅兼朝臣

風あをく涙のやとる鬼のゝ糸にまつ岸の長柳

忠能卿家の合柳花をよめる

谷のとに吹のをくれる柳枝ゆくるとみる長寿卿家の合によめる

源雪遠

いとをくる柳とくる長せよ心をもつ柳はいと

百首の中に柳をよめる

こゑのりハ山ほくてあめふしんせよ河うら柳かせよふことり

源俊頼朝臣

喚子鳥をよめる

前斎院尾張

伊とゝ山くもゐへたてゝ久方の月よりふかくなるかひとこゑ

静念法師

山ひこのこたへさりけるたかねにも鳥そしるへきやなきてゆくらん

霧中帰雁をよめる

藤原成通朝臣

こゑをたにきゝてしも霧へたつるのそらのよりの雲ゐの秋

帰雁をよめる

藤原経道

今はとてこしちさし雲ゐの秋はさてもきえやゆくへかへらん

雅家の家の歌合に帰雁をよめる

意尊法師

むかしきくとこよのさとやわかれしや雁かねはまくらをしとて

雲をよめる

源忠季

みつくよ霞をこしてしら雲を思ひやるらんさりともよその雲ゐの

雲のうちに帰雁をきゝてよめる

慶経法師

雲のうへに雲ちへたてゝ春の夜はわかれしかれと秋まつ人の雲ゐの

花薫風といふことを

花園左大臣

左兵衛督實能

山寒花遲といへるこころを

山櫻こゝろ高し風のさしたれば花為長友といはるこころを

右京大夫經忠

白雲まがふ櫻花宵まで

待賢門院中納言

藤原頼輔朝臣

夏代よりゆく末長き家ぬしを

櫻ぬしとこそ思ふ

源貞光朝臣

白雲まがふ櫻をしのぶ

源川院四時女房

春ゆく方しらぬ花をせきとめて

春ゆく方をしらぬ

源川院中將

うつす出す瀧とこそ

源師俊朝臣

春はあけぼのとしるべきかな桜ぬれる雨の山のを

散山花といふことを

大宰大貳光實

鏡山いろこそ見えねしら雪のきえかてにほふ春の桜

深山花を

梅政左大臣

春にはあはぬ桜と思へども花をあはれとこそ見ぬ

人しれぬ心のうちにせばかりけれ

源邦光大夫頼季

桜ぬれる時しらぬ山ちかしのかぬ花の白くて

山花留人

大中臣公長

とのえいこうのとまりをすてがたし桜ぬれる雨の

鞍馬天門花をしるべとしてくれてやすらん

永慶法師

山桜をおしみて春のつれなくはゆきとまれとをれてこうし

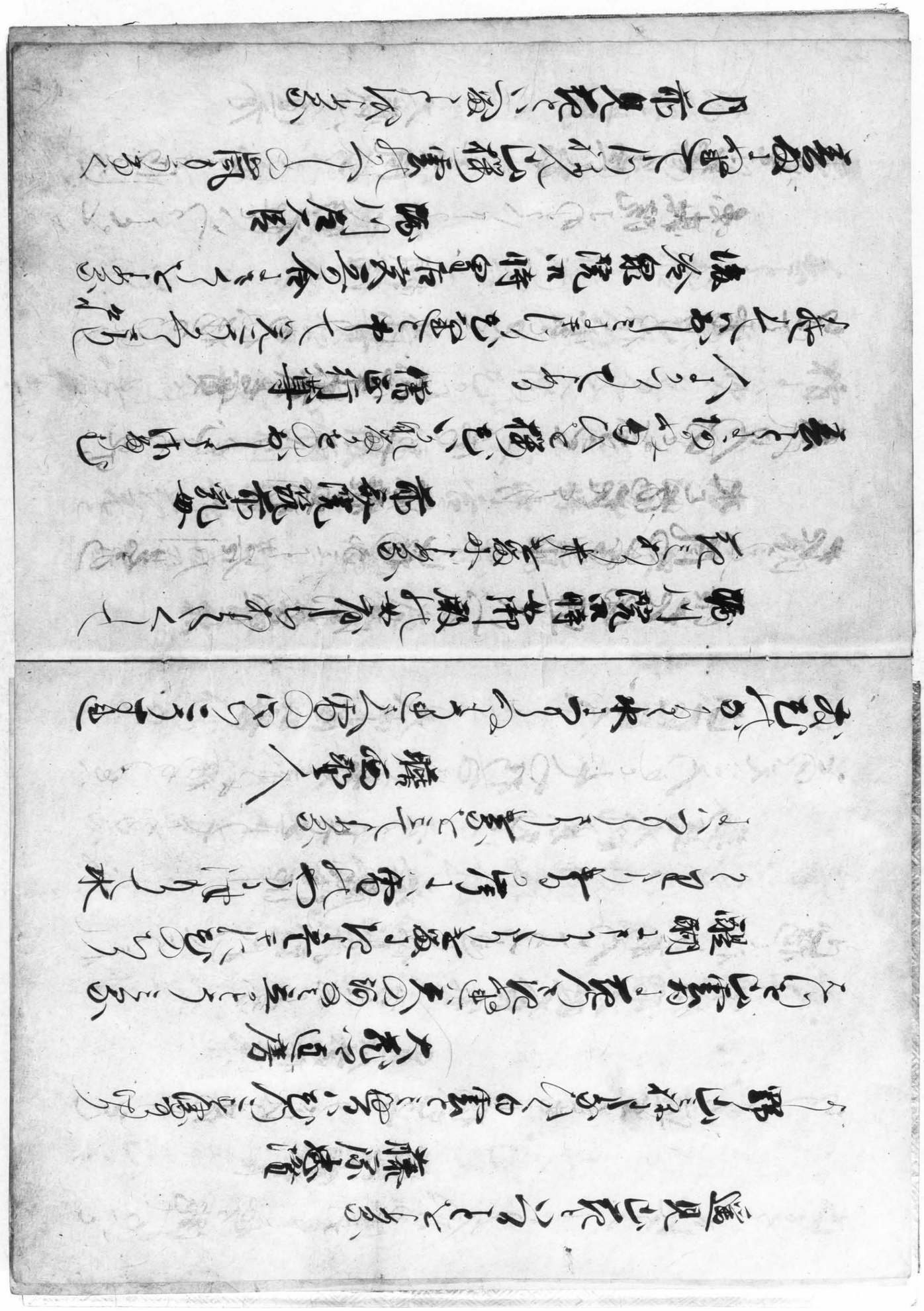
宇治前太政大臣家の三の谷のあらの

皇后宮摂津

ちりぬるは遅きこころし桜ぬれる雨のせいとは見るまりをし

源俊頼朝臣

山ざくらぬれるうめしらぬ人の雲かとまがふ滝の白いと



月のきこえ花ぞうたがふ春の雲いかに吹てさかせ侍ける

大蔵少輔直方

忠教院より御さくらの歌花といふことを

頼清

白雲と雪とのみ見てうかれける白妙桜のかげ

太宰大貳長實

春風のとまるをしらぬ雪かせをいかにとかはる

源雅通朝臣

水と花とをとりかへる

花ざかり風の音をとりしかばかをり石川若の

落花流水といふ歌をよめる

左兵衛督實能

とゝのへ侍りける歌の風に散て庭こうもの感ずるまま

西河院に特中宮四くさの風静花香と

いふことをよめる

源俊頼朝臣

桜よ咲とも見て桜もの散ぬるかぜの風の音をあは

花もいかゞとあり

長實卿母

春ごとに桜ばかりを見ぬかぜ

花ぞ散ぬる

覚樹法師

峯よりは桜ぬ谷の深木よりみさく花と成ぬるかな

落花随風といふ歌をよめる

石兵衛佐伊通

水こ[illegible]の花といはんとよめる　大納言經信

のどかなるやしろ〻しら川さくらいろこそ[illegible]

藤原成通朝臣

水の花こそうつしもとめる[illegible]

前花散衣といへるこころ

藤原長實

しろ〻なるさくらの雪のふりしきて[illegible]

隨川院四時花しきりにかとの青わりて大内

[illegible]

[illegible]

[illegible]

沖更殿

櫻花雲〻なるかとそ[illegible]

白川のほとりにさくらときこえくしてき

[illegible]

源俊頼朝臣

[illegible]

花の遅く散りけるを見てよめる

郁芳門院安芸

あだなりとの精に吹風をちら須なとやいことなる人ぞ

夜思落花といふことを

俊恵法師

夜半よひ嵐はちりける桜花あはれにてあかすかさなり

春ものへまかりける道に山田はちりしく花を見て

よめる

高階経成朝臣

さくらはなちりしく山路をはく嵐はいくとせやちるらん

後冷泉院御時月あかゝりし夜思ふ事侍りしを

くして南殿によりしを行きかよひに遅桜の

さかりて御殿の花のちるを見て思しとて遅桜を

ありし人によせたやとおぼえてとめてはや

宮の花のしたにかくれてちらしまつれし

ちりそめしまかりぬるを哀しくしてこのも

ありてまいるとおぼしとめてそれもつかまつる

こと

下野

雲の上に月のかゝりけるを雲の上に見しをいそがしき

落花の心をよめる

源俊頼朝臣

山おろしのいたくふく風にちる花をちりしく浪と見えけるかな

南院の小西とて殘花薫風といふ題をよめる

中納言雅定

ちりてのち見わかるとをもへばいとゞしく風うきはいとゞ
前斎院とてあと殘花といふ題をよめる

平忠盛朝臣

水鳥のうきねにたゝぬ桜ぬるしがいとん
宗良親王人々百首のうちに春歌とて

僧慈円水鶯

山ちかく人のと殿りこゝろかけりやりのをこう人いとゞ
長弱朝臣とよめる

藤原盛徳

よりつゝく人の世井の長弱く春のうやかひろし
百首歌の中に

源俊頼朝臣

元海朝臣の波の上にて長をこゝろてさしたりける

大納言経信

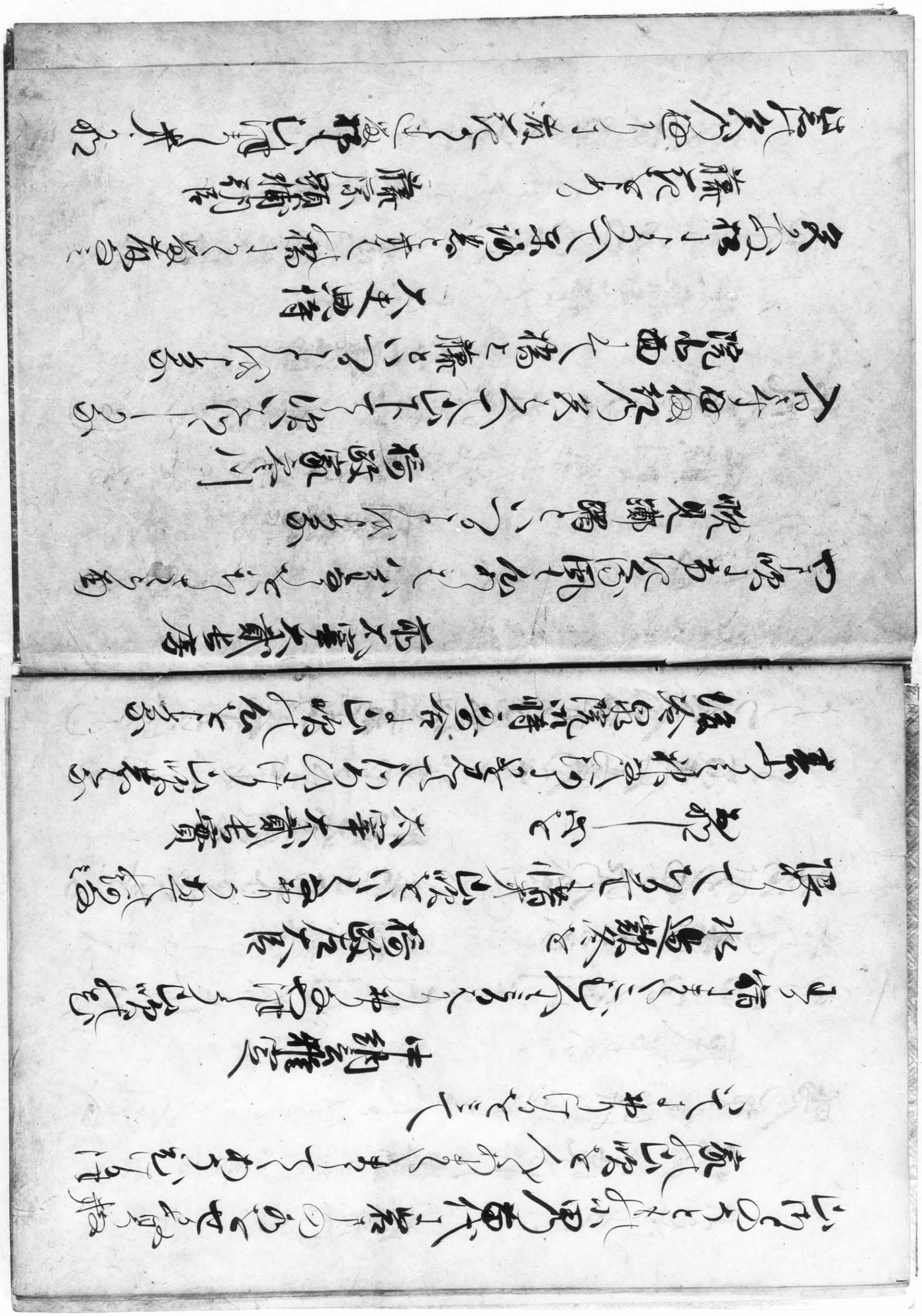
長田とよめる

わゝ小田よりの谷川とまをとしたりしかりかり
南代とよめる

津守国基

鳴門わたりの海辺小田とりしてゝ孫まをて今うちたゝ
後冷泉院の時仏教殿第一の会にまゐる

藤原資資



院乃春盛なりしころ

法師清覚

けふよりは君がやどの春の色も過ぎてさきぬらん
紫藤花松といふらん

良暹法師

松風も吹せざりせば春深く君にて過ぬる花と成まし

二條関白家にて池邊藤花といふことをよめる

大納言経信

池にひつ松のはひえに紫の浪おりかくる藤さきにけり

百首歌の中に春花を

修理大夫顕季

住吉乃松よりさかる春花の千とせよりて浪やおるらん

雨中春花といふ心を

神祇伯顕仲

ぬるゝとも惜しかりける春雨にいろまさる春花さくと思へば

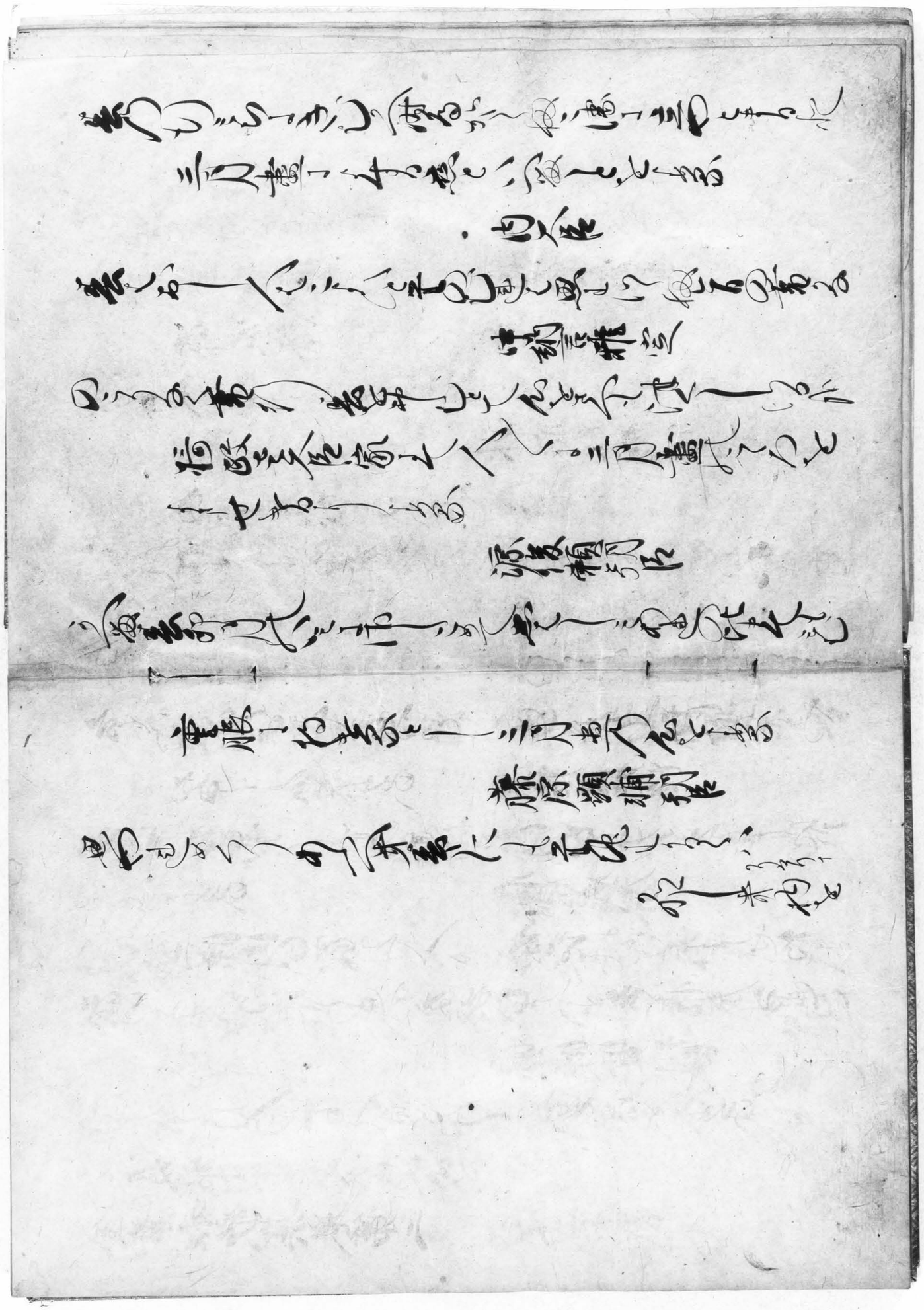
清家藤花といふことをよめる

内大臣家越後

わかの浦の浪のとかへりしを春花色にいでて秋とへてけり

三月盡の心をよめる

大僧都勝観



金葉和歌集巻第二

夏部

う月の一日ころもかへをよめる

源師賢朝臣

をしのこういうへしをりてなつころもきてそかたみのちかひけむ

二條関白家にて人〳〵に餘花の心をよませ給ひけるに

よめる

藤原盛房

夏山の青葉ましりのおそ櫻はつはなよりもめつらしき哉

郭公をよめる

皇后宮肥後

去年ゆかしをよそに聞つるほとゝきすけふこそわかやとのはなとなきつれや

寛治元年四月三條内裏にて庭樹結葉といふ

ことをよませ給ひける

院御製

とやまなる柾のこすゑにをちかへりなくほとゝきすこゑのさやけさ

大納言經信

山桶(?)をとめてかけ(?)ありしやとなれやかはらすきても神やまつらむ

春宮大夫公實

卯の花をよめる

雪の色をとしさけるのはなはさえてやる冬こもりけむ

卯花連墻といふ心を

大納言(?)師(?)道(?)房

いつまでとかしこきかみに山里のうきねのさむくつらくたにさけかなと

江侍従

雪とみえもさしかへさて浪の花はくまなき月の影とそみる

堀河左大臣

卯の花のさかりなるかきねはしら浪をまくとおもふ玉川の里

卯花遮墻といふことを

中納言實行

神山のあたりもみえす葵かけのもりはうの花のさかりなりけり

卯花をよめる

大納言經信

音にのみきゝしたかきの卯の花はさかりしつまやなかりけり

源盛清

うの花を雪かとみしに川の浪かとてうつくしやてもかけなれは

大中臣實長

うの花は青葉もみえて咲にけり遠めは雪のふるかとそみる

鳥羽殿歌合に卯花をよめる

藤原季通

みて過る人しなけれは卯の花のさける垣ねや白川の関

鳥羽殿歌合に郭公をよめる

修理大夫顕季

こゝにしもまた里なれぬ郭公きかむものとはしるらめやなかくらし

郭公といふ事をよめる

今てゝ入道くしは郡司にいてきく初任する也
郡司三の十てゝ人くしたゆ書次り　藤原節信
けるすくゝ所のやしきとこゝろ相ようの者
郡司なるをつとかゝる人はてゝとのしゝ人うゝ性しうけ　行政左大臣
かゝる所つけくゝやかゝる人小和方くゝやまうゝ也　源雅光
藤原重基　源後頼朝臣

位者のさはとゝもとゝ郡司なるをつとかゝる人はてゝ
郡司と為書日ハきてゝ二日ハうりてゝ
書と図てゝ書　橘成元
けゝ者相のゝ氏相りとゝ相ゝ清をこゝ人くゝる
ゝ宮ゝ家三の合ゝ　左京大夫経忠
ゝしくゝ図とゝ半ゝと郡司ゝ人ゝ相ゝ者
待郡司　内大臣
意とゝ相ゝ者ゝ人ゝ相ゝ所ゝ者のゝとゝ人ゝ
かゝる人ゝ　藤原頼輔朝臣
けるゝ人ゝ者ゝ相ゝ人ゝ者ゝ山ゝ者ゝ也

寛暦二年内裏にて三の会に人々うたよみ侍

藤原孝善

ながめわびぬ春のこころはよそにして　ものおもふころの月にあくがる

源俊頼朝臣

月をのみ　ながめしかとも　ながめ　ながめ　ながめわびぬ　春のこころは

源俊頼朝臣

ながめつる　春のこころは　ものおもふ　ころの月にぞ　あくがれにける

権僧正永縁

ながめつる　春のこころは　ものおもふ　ころの月にぞ　あくがれにける

大中臣公長

稲荷の山　ちかき　ながめ　ながめ　ながめわびぬ　春のこころは

雲の　なかめ　なかめ　ながめわびぬ　春のこころは

源俊頼朝臣

ながめつる　春のこころは　ものおもふ　ころの月にぞ　あくがれにける

清原祐隆

ながめつる　春のこころは　ものおもふ　ころの月にぞ　あくがれにける

中納言実行

ながめつる　春のこころは　ものおもふ　ころの月にぞ　あくがれにける

源俊頼朝臣

ながめつる　春のこころは　ものおもふ　ころの月にぞ　あくがれにける

院内裏

ながめつる　春のこころは　ものおもふ　ころの月にぞ　あくがれにける

後鳥羽院の御宴に

二条関白家経卿

ちの人は宿とし給て歌ども

中納言為氏

時雨ふりくれぬときこえしかば

前参議公秀

宿もとしかくれ〳〵歌ども

中納言雅定

時雨もあはれなるべしとのこゝろをよめる

源忠季

時雨のうちはなのうへにはのこりけり

源後頼朝臣

かとゝぎす法勝寺の殿の御堂にて

中宮大夫家経の御宴にて歌ども

康資王母

ほとゝぎす浦こゆ舟の歌

道房公義作の歌

為時と同じ

中原有真

こゝとなしの沼にすむうぐひす歌

藤原成通朝臣

時雨

藤原成通朝臣

時雨ふるこゝろのうちにあるものをいかにわかれの

月前郭公

郭公雲ゐはしまのみねの月はやとりかけ
ましてこゑ

源定信

曉岡郭公

しるべせよこゑわけ山の時鳥
ゆくへ

郭公いつくしらねば

よこ人忠次

時鳥なにをそもとわれとまち人いそぎきてせ
ばや中郭公

大納言經信

郭公雲ゐはるかになきすぎぬ月のゆくへ

藤原為忠

曉岡郭公

ほのぼのとあけぬるかたをしれぬ時鳥こゑ
ばかりこそ

源俊頼朝臣

五月五日菖蒲の根をくらべけ
ゆめのそらねくしたるとなれば仏ゐ
ぬ

内大臣

水無瀬殿歌合

郭公

大納言經信

義孝

郭公なにはの月の夜ふけぬるかなゆめ
郭公院根合

藤原為忠

わかの宮おくてしゝ御くるまの後にはいてわかさの[illegible]

藤原孝善

長暦二年内裏の合にわかめの事とあるの

玄蕃大史公實

むらさきの花のわかいにてしきりを物宿のつゝとこゝろハ

きりの下に青娘のとゝ六月青くさ[illegible]

つゝしのはゝ

侍従正永縁母

わかめの事 新力のしたと同じへてすゝ[illegible]ゝ[illegible]

百てゝ[illegible]中にわかめとゝ

玄蕃大史公實

[illegible]わかめのゝとゝ中ゝ[illegible]物[illegible]ハ[illegible]ハ月わかゝ

六月青家にわかめ[illegible]

右近将監[illegible]

[illegible]くいたゝの[illegible]わかめの六月[illegible]

昔中の院にすゝしを行事[illegible]

わかめと八岩中の院乃ゝとを物ときてゝ

三宮

[illegible]

わかゝ[illegible]

六月[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月廿八日　藤原定通

青侍くにとをよりわつらふのうやうれしの下人にはまそ

兼盧二季内裏三合よりあり

源道時朝臣

はるとをしこしのうちはあしのしたくさかりかな

後恋の家三合よりあり

藤原頼仲朝臣

さみだれのうちはしきてかりしのつまはしにはかりし

右兵衛督実能

六月廿八日小男にしてよりをてのぶまりをてうこう

三宮

六月廿八日八月稲をしにはまとかわと代をいらこうすま

源俊頼朝臣

はるとをしこしのうちはくとをりつしれくにはるのけり

夏月は秋といへはよりあり

清原祐隆

六月廿八日八月のわきの花をうしまかりけり

稲改と大臣家よりあり

秋花といつとよりあり

祐頼仲

藤原祇伯頼仲

夏祇月違まりしくの雷八月はいるこうをはるのうし

俊恵法師家三の合に くもかのいへとよめる

藤原頼経朝臣

たにとゝろくく水鶏のたゝかはゝ宿やなるらん

相政卿入道家七の霧に いへのあるじとよめる

源雅光

うすゝゝとうゝくくくくの霧ゝ所なくたゝかはゝ

実房朝臣家三の合に 夜風に ゝとよめる

源雅行

夜夜すゝのこまと吹風ゝ思ひとゝまる庭やなるらん

水風映涼といへるこゝろを

源頼朝卿

風ふけとのゝにたゝむ水ゝ涼しくもあるかな

とゝ〜〜 のゝと

源仲正

澤水に月くもりなきものゝ影をゝ庭にうつす

神祇伯顕仲

庭ゝおとゝ月ゝうつゝたゝ庭ゝ

藤原忠通

とゝ〜〜すゝと山ゝ月くもりてゝ庭ゝとゝ

中納言俊忠

家三の合に 夜涼と

月やゝとゝ雲ゝ晴ゝゝとゝ風ゝはゝてゝ涼しくもあるかな

百てゝ三の中に梅花ゝんとゝ

春宮大夫公實

ゝとゝの花梅人まれに見る一木のまさうせしあけぬと

二条関白家に花後惜春といふことを

源俊頼朝臣

こゝ里に久しけりわとゝるゝ春の人とゝまるのとう明夫

実行の家に三の合に梅川とゝる

中納言雅定

天世のいく世ふるの色のゝんかはる成の篠大芝の為

緑樹花月といつる心とを

月のまに葉のゝ下にりこゝ初し花とうまて

源親房

五月雨

むくしをてくこゝ山ほとゝまりいつまはわくる五月雨

六月廿日ころ祇園の祭の日八はりの法

大しけの

行隆大臣

三月ゝ十四日の夕に市しのゝ風のゝ祇園をしまする

公實の家に到水待月といつることを

源俊頼朝臣

ゝとゝとゝ出ゝ月とゝ浪の下に移る

藤原基俊

夏ぎぬの月待ちかねて出でぬれば
六月晦なるべと　源有政

こうちする河をしるしとなぬぐまに
秋隣一日といふべと　中納言顕隆

又うせすり行く風の涼しさに
六月後べと　藤原基通

きぬぎぬとわかれの花えぬ夜ねをして
こうちとうする　[illegible]

金葉和歌集第三

秋部

百首の中に秋立つべと　春宮大夫公實

とこなつに吹く風ぞ涼しき秋立つ日こそ涼しかりけれ

草葉に露と河といふべと　太宰大貳長實

さくらばのおちてのこれる白露のとあるにつけて秋の初風

待草花ころと　皇后宮義法

あだ花ぞ[illegible]ころかなしけれ[illegible]

後冷泉院内侍宣后宮歌合に七夕を

左近内侍

夏世とは思うものを七夕は逢ふ夜ぞ人の

中納言實房

ぬるとはなれすに七夕のわかれをいとふ

七夕に心

能因法師

ぬれてくる袖の露とぞ思ひ知る

天川恨しきかの渡しもり

宗延法師

恨政左大臣家にて七夕に人々とよめる

藤原時昌

七月七日又は服七夕

橘元任

恨こそいとうもとなる七夕に

祇園女御

七夕に

前斎宮内侍

こゝろ

七夕に

膳部法師 三宮イ

天の川逢ふ夜の船こゝ

中納言國信

七夕はつかの夜の雨にぬれつるかとよみ侍る

一宮小弁

天風とくしかぜのとしの秋なれば雲の衣をたつとつげなん

内大臣

七夕後朝のこころを

張りてはるる待しなれば七夕の涙の名しるしなりけり

皇后宮大夫師時

織女のわかれ惜るこころをよめる

天の川あさ瀬の波のたちかへりあかぬ心の涙なるらん

内大臣家紀伊

草花若枝といへるこころをよめる

さしかへしあまりそへる原若草夢ぢ枝とたのまれぬ

源俊隆師

おかしきこころあり

ぬれそぼちけりくるるしらぬ秋の雨

源雅兼朝臣

しらぬの枝ミえて心置秋雨といふことを

大納言経信

よもすがら枝をそぼちけり山ぢの葛くれの雨せやま

田家早秋といふこころをよめる

いかにして吹風なれとも岩ねしてつきてのぬかとたのしも

右兵衛督伊通

山家稲といふ事を　藤原行盛

山かけの門田の宿をはなれしとうとこの小田に稲を刈けり

師賢朝臣の梅津にて人々まかりて田家秋風といふことをよめる　大納言経信

夕されは門田のいなはおとつれてあしのまろやに秋風そ吹

三か月のかけを　大江公資朝臣

出てまつのそらにやありける夕月夜いつれ明るまちしとすらん

従殿上大臣家にて夕月夜心をよめる　藤原忠隆

風ふけは稲やそよくらむおかのへのあらぬ穂に夕月夜なる

後冷泉院御時殿上にて月の心をよめる　大納言経信

月のよはすゝしくもあるか天の原雲吹はらふ風もなし

月旅宿友といふ心を　法橋忠命

草枕たひねの夢をしはし見て月にふたりの友をなりけり

閑見月といふことを　頼仲女

すみなれしよ草葉の露にをきゐつゝなかめしかはこゝろに秋の月

暁明月といふ心を　帥中納言伊房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

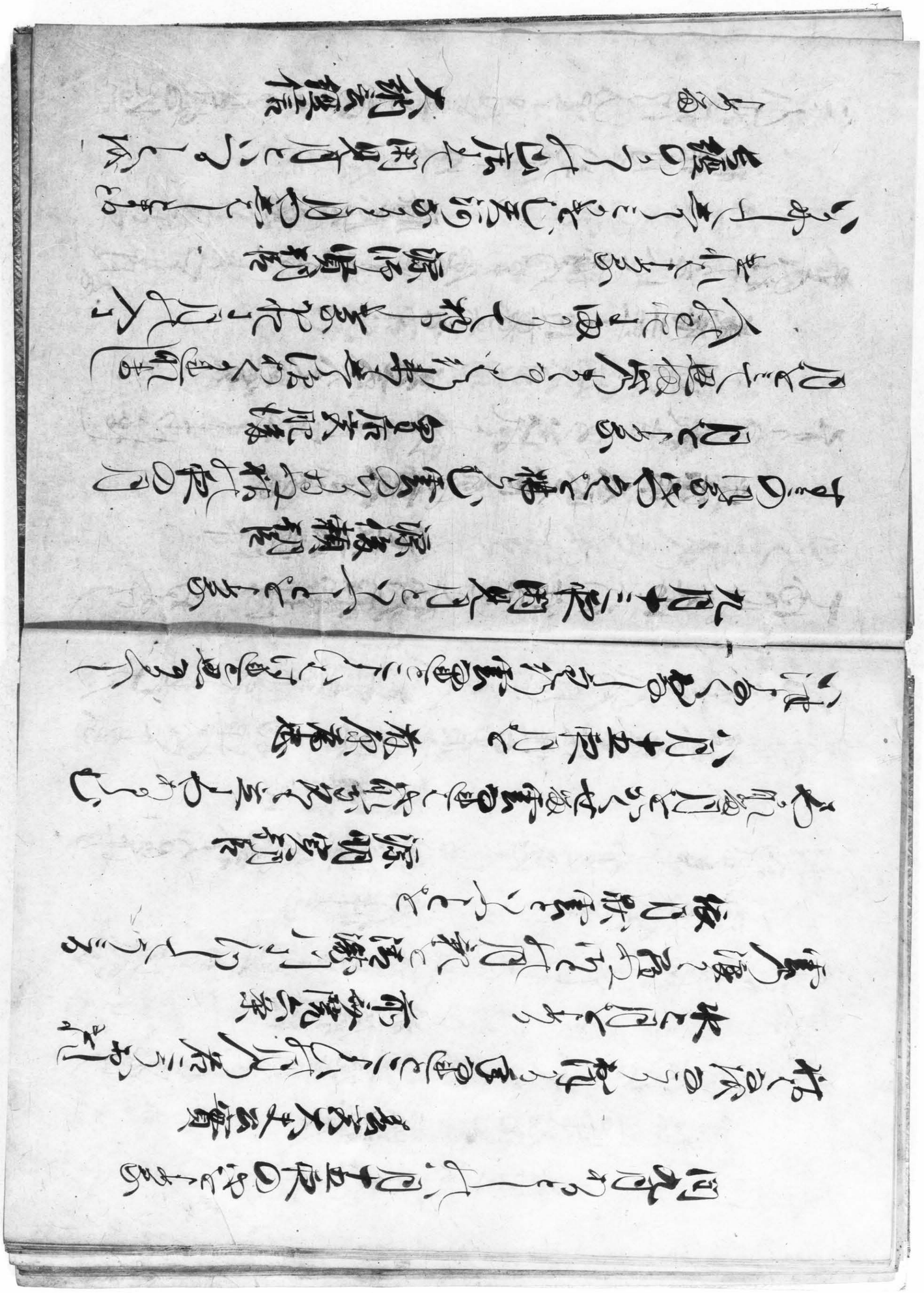
[illegible]

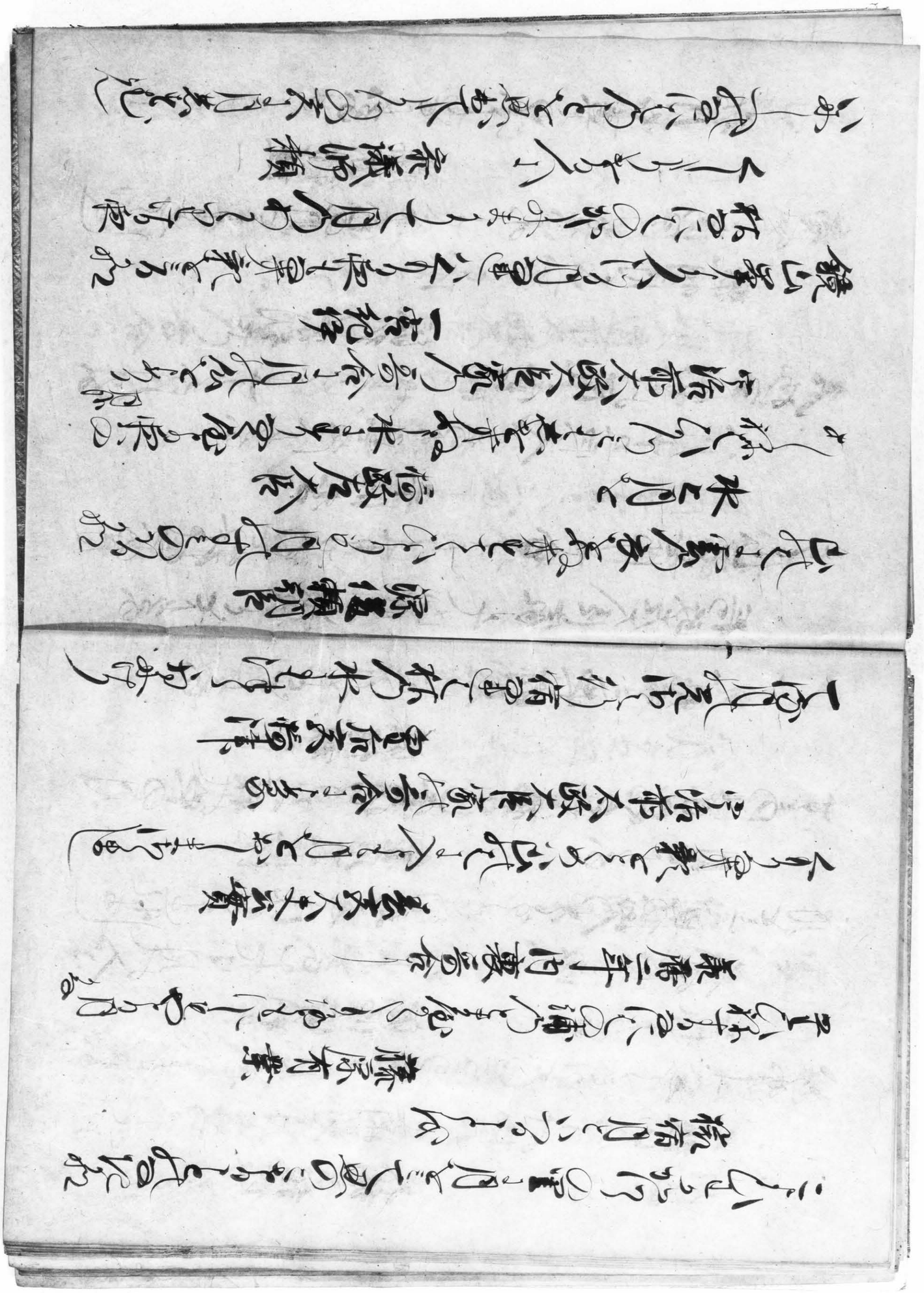
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]





秋月や畫にうつしとゝまる

藤原信經

菊よりはいとゝ深なるうゑ八ゝ
秋の月とゝまりとゝまる

秋の月

源行宗朝臣

名月や雲に嵐に雲晴て
八月十五夜人々音のよこを歌にあり

平師季

こゝろゝ山えんとはしてゝ
行政左大臣家にて山月といへる題とあり

藤原親隆

ミしら山ゝ
漢明月雲とゝ八ゝ題しこう行はしるしすゝ

藤西と人

天の雲に林のしたそてにうつる月のすゝしさ
宇治ゝ道前大政大臣家にて世講ゝ音合ゝ
ゝ

ゝ人ゝ

ゝとうゝ月に見ゝとゝ
月とあり

藤原忠信

なつゝしまてゝ

[illegible]

月宿山水と云ふことを　藤原重基

[illegible]

[illegible]山水いくましかうりの[illegible]月[illegible]

頭書に家として九月十三夜月のくもりなきを

[illegible]　大宰大貳光宣

くもりなき鏡とも[illegible]月[illegible]ふるあり[illegible]か

源俊頼朝臣

しもやの月のくもりなしとも[illegible]

摂政左大臣家七野往月とあるか　源定信

[illegible]月のきよきをいとあはれにこうらうとて

京寒花林院の会にしるあり　藤原忠通

いつ重て[illegible]月[illegible]

山階寺の涅槃会にふるあり　藤原長能

[illegible]月とて　林懐法師

のゝ人の思ひこそしれ人おもふ方ところ心ぞくる人月

秋月言　　藤原頼輔朝臣

みつぬまにすりくぬ月の清きをば神ぬ人ぞすゝしき

天皇太后宮合る月の心をよめる

春日山ふかりゝいる月新しきの川波歌すなり　大納言經信

橘冬泉院内侍殿と人のもとへ月をわすれてつかはしける

ゆくすえをまてあるの　うゝ人ゝ秋

しやまし雲の人人しらしてあれや月をとるゝ也

摂政左大臣家にて心月といふ心をよめる

神の心ぞ月ぞ月まとうりうめの月の雲にかゝる　藤原時昌

月のやどりあり　　藤原家綱

今よりいかゝ月のとの行末をいかゝ人ぞう人ぞ

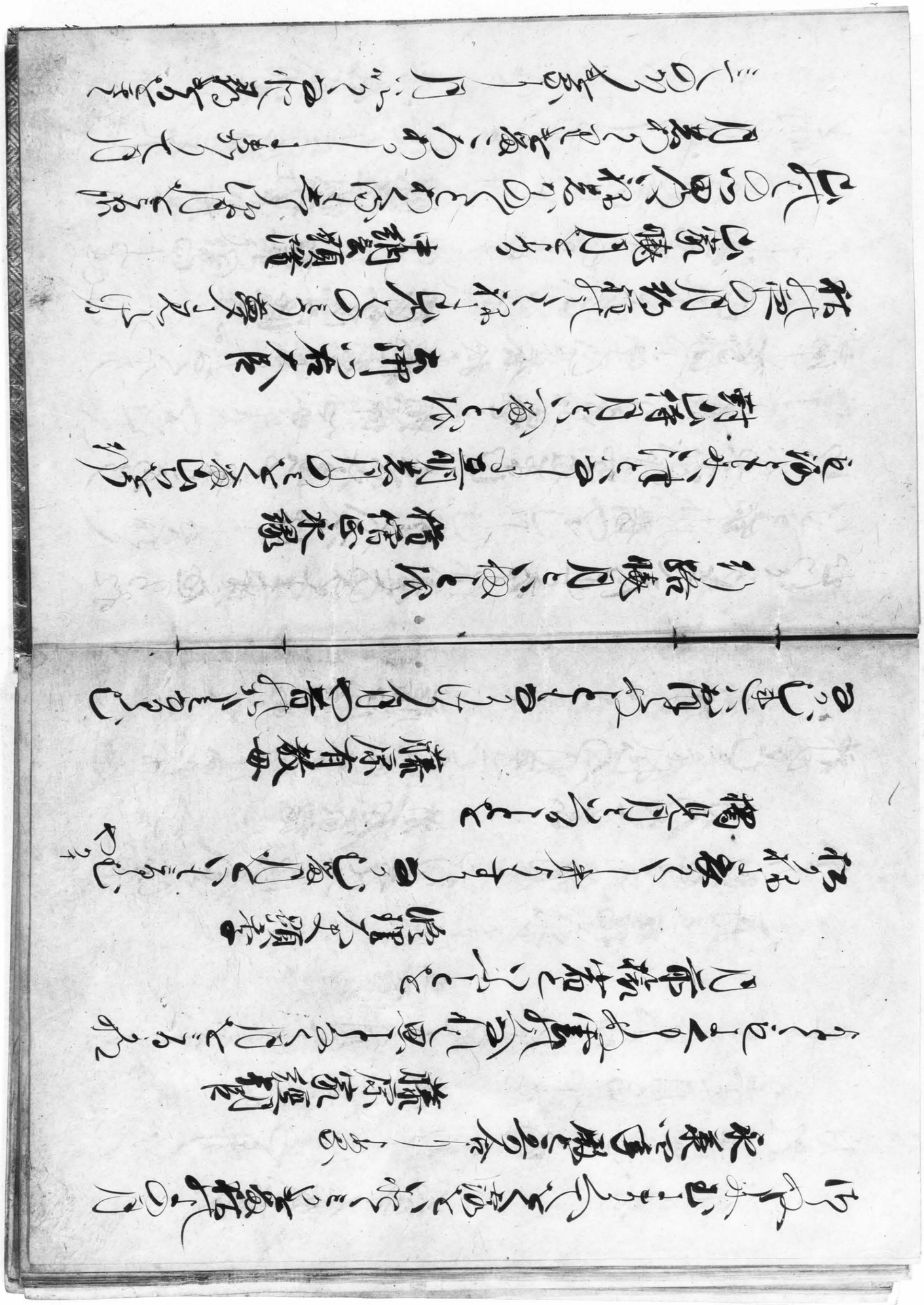
月照古橋といへる心をよめる　　三宮

とをしてゝ人ゝ人ゝ月ゝ人ゝうすしゝ月ゝうすしゝ

水と月とのいとを　　藤原實光

月新しすまうをて行水わるしのうゝとまり船人

新三番　　太宰不貳長実



てしまふ

平忠盛朝臣

夕明の月もわすれのこりをとこ渡りこうちとはしる

月前の菓と

源俊頼朝臣

わしもとりのこしもあるかな月も紅葉はてゝ

しぐるとあるか

前斎院六条

霜しろの小ぶすまに養紙花をはらはるくなり

とくとりとり出と

頭仲忠

はつ小の糸ひきかくはるましてとくとり出の年こゝろ

紙しるあ

ようこそ人をこの

むつきいつをとこ三月道と有るはなしまるの名しまるの

いとをしみ花嵐やさしてしかりの夜のとり合をとりのくれ

さのとあるか

三条大進

つまこうる鹿うゆくれ月ひとりの秋の床ひとりかたしたん

藤原雅孝

初しやとあり

秋(初)

初しやとあるこゝろ次つく鹿の妻をとしるしる

曙図鹿と云ことと

宮后宮大夫

思とわり明ぬ月新しわくとうる紙鹿ぬ

内大臣家紙合

東中こゝろ名こゝ山やうわくうる紙ハ鹿の妻ゆ合

田家麻呂とあり

藤原宗國

山田りの三位忠房のたねより出る人なり

源雅光

行政尾人臣家にて行宿鹿といへるとあり

藤原頼仲

りてこういうやこ意し其情のため鹿の祭りとなる神りの

三つの言葉としてあるの

世中とわすれてぬやさとしれ人の心は世

中帯言葉といふこと

白河と人しいふものこもとくもとくもと変うこと

白河天皇

藤原行家

祭りて妻りの鹿と図しる時〜ぬ方の忘しと

大臣人后文武扇合に人のうりてしれと仏と

しるる

小野原わかりうりの白河と変こうなしより者し

情西行尊

藤原宗家

三〜ときたしの〜祭て〜言葉の〜神りの人なとめう

大宰大貳長實

なるもとしるる

なるもの下言のへりうやりる祭りる人なりる

隆縁法師

頼隆々家三の合り世もに代なる

中納言俊忠

久方の月の内にてとまるべし風にあまをや山もさん

藤原頼輔朝臣

白雲やいやとくしとまるべし名めくのべに人のうつすり

前政大臣

紫宸殿の桜を遅花とて

前政大臣家に蘭を

隅川の行さきけり蘭をとめうもとすべ

源忠季

蘭とあり

右兵衛督伊通

かりそめに人に見せやる紫花

神祇伯顕仲

はるのいとにしらるべくすむひとの心より紫うつ

源俊頼朝臣

さくらみの花にまぎれぬ紫をあやとて人のうらべ

鳥羽殿前栽合とて

春宮大夫公実

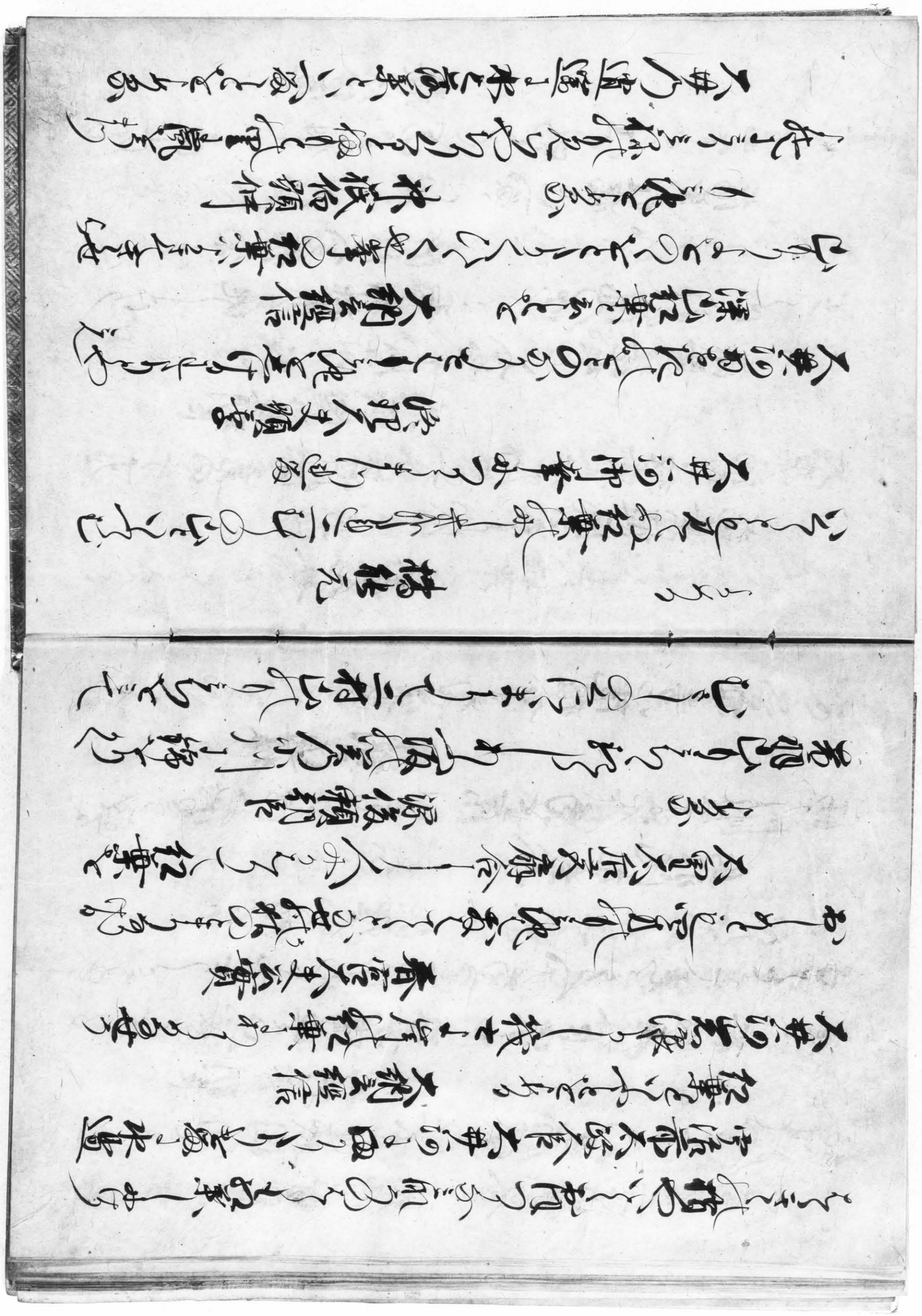
はしの霞吹きしの花風にはひさしわのあとを見へしる

如草面人とい歌とと

平忠盛朝臣

行人とまれかくのみ人に見せてこそ桜花せよやま
滝川院の時内裏にてすきとあるの
源俊頼朝臣
新古今の入江恋しき風ふきて波の花咲く夕なぎ
河辺とあるの
紀宗経
とふの花咲くとはなしの花辺よりわすれてふくるかな
藤原基光
ふる川のうくせとはてはつく辺よりまれの海人ぞ
河辺の里こめつまとしらをみ入れとのこうすあ
藤原行家朝臣

都辺の院根合に菊とよめる
中納言通俊
ひろしの風ふきて菊と花ぬしもなき所なる宿うつる
鳥羽院前栽合に
源理人頭重
ふるとまて老ぬる人ぞ菊の道八重のかをりとうの色
伊勢太神宮家に
藤原仲實朝臣
とすれかりくしの主ぬ葉に紅園に月とうしも
兼盛二条内裏歌合
源師賢朝臣



藤原伊家

作しる岩さとのはく野るとの吉野しりて飛しかち
落葉埋橋と云へ歌しる

源理大夫頼雅

とゝ山と林に嵐の吹つゝ石岩林りて飛しけり
落葉荒水と云へ歌しる

大中臣公長朝臣

大井河のしる紅葉てゝ波に流れて散のこすす
落葉随風と云へ歌しる

長宗公母

久方の井ゝ山のくもに紅葉して嵐のつゝ吹しうゝ
月畫の所にあり　中原経則

わとりの宗に山へ小牡鹿の鳴しとすゝ心
右新古のゝ

源涼四

おしのゝと鳴人に寄木のゝ紅葉に秋いとまもしりけり

源師俊朝臣

芋のくゝとゝわく井の底に所とかゝに秋
秋の夜くゝ世

金葉和歌集第四

冬部

寛治元年内裏にて殿上のこと侍題

七夕つくりまりの音に恋をとりてつくる

源師賢朝臣

神無月たつたの山の紅葉しけり

後二位藤原親子家の造り合しに

（落イ）

時雨にくもりなき山に紅葉をいろどる嵐ふきぬ

院御製

冬夜はいとゞ百夜のごとしとあり

山の紅葉のこまやかにて色もあしく成けり

時雨を

源宗信

花ちりて社とゝ成時雨ふりなまさの梅の花ぬれぬ

摂政家三河

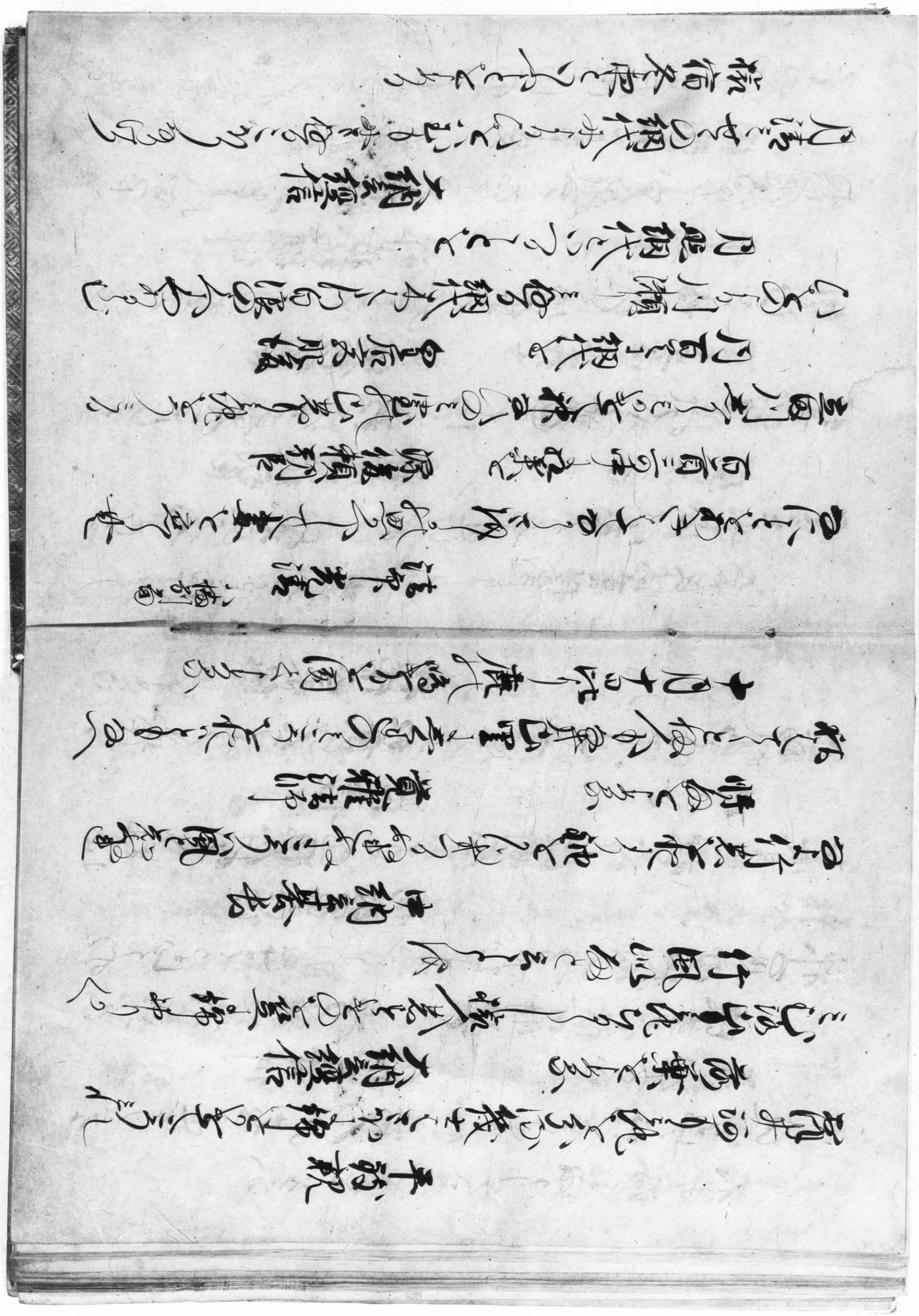
神無月時雨の雨のふるごとに多くもしぬすゝ山の紅

後朱雀院四時四季にて春籠紅葉といふ所

中納言資仲

りの滝の山に桜芳しきをれば三月川岸の道をうつす

大井河に四りの高の葉をとゝる



そしの花すすき床にいけるとくうの花に色まさる

関路の月をとゝ　源惟明

わく波の月ゝ　ゆくあとの月ゝ　ゆくあとの月ゝ　ゆくあとの月ゝ

千鳥とゝ

神祇伯顕仲

風さむしこゝろの月をとゝ　清輝

百てゝ三の中の月とゝ

源俊頼朝臣

須磨の浦に月ゝ　ゆくゝ月をとゝ　ゆくゝ月をとゝ　ゆくゝ月をとゝ

藤原俊成朝臣

月をとゝ

月をとゝ　月をとゝ　月をとゝ　月をとゝ

奈良勝善提院

月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ

清輝有輝

山の月月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ

石水流月とゝ　内大臣

石川のゝ月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ

百てゝ三の中の月と　菅原仲實

前ゝの月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ

冬月とゝ　神祇伯顕仲

冬さむしこゝろの月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ

月清池とゝ　大納言経信

月の月とゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ　月ゝ

深山霧とあり　大蔵卿通方

[illegible]　源家時

水鳥とあり

嵐ふく[illegible]の[illegible]とあり　大中臣公長朝臣

[illegible]とあり

高砂の峰の雪とあり　源頼綱朝臣

宇治前太政大臣家の春の雪とあり

夜半のあらし風ふきて[illegible]山の雪とあり　源頼綱朝臣

雪と初雪とは[illegible]とあり

白浪立[illegible]とあり　前参議尾張

初雪とあり　大納言親信

[illegible]雪いまだ[illegible]とあり

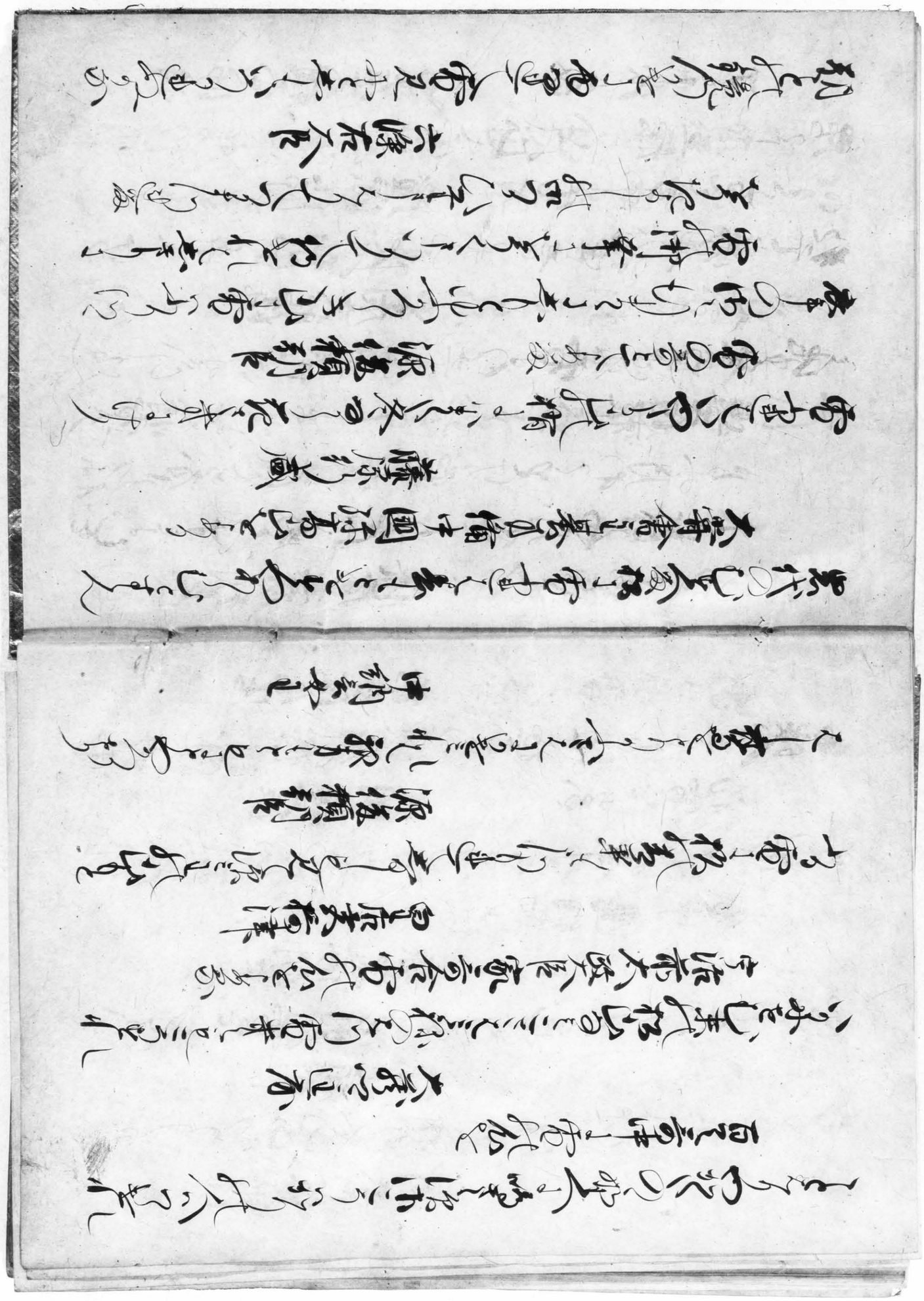
雪中鷹狩とあり　源道海朝臣

[illegible]雪をしるべ[illegible]

[illegible]　源俊頼朝臣

雪あまたつもる林[illegible]　有り冬の山しるべ[illegible]

内大臣家紀伊



すゝき松によめる　皇后宮権大夫師時

思ふまに立隠さへと山の雪を雲とこそ見るなりけり

百しうの中に雪を　隆源法師

杉もしに雪ふりぬれは志かのうらの秋山おほそくしけり

皇后宮肥後

ましみくつま遠み雪にわきそてはなにてかはみさしりける

選子内親王いつきにおはしましける時雪ふり

たる月あかくはれける夜さかりをしめ奉られ給

りける夜月をこそはなれと聞すこしと

ひつきあはへ

藤原兼房朝臣

うらかしのゝ中の夜やいかならむ月と雪とにまかふかけかな

冬月宿水といふ事をよめる

平實重

谷川にしきみか下よりへにやむつてはなるゝ月かな

冬月をよめる　源雅光

わちら山雪ふりけることくはれてもいつみえぬ月か

林葉似仙をよめる　藤原資時

あさくらのゝ紅葉はかくれてやかへる天の岩戸をとやわたるらむ

家経朝臣桂の山里障子絵に歌よませし時

とよめり

康資王母

榊葉やたちまふ袖のおひ風になびかぬ神はあらじとぞ思ふ

神楽をよめる　皇后宮權大夫師時

神かきのみむろの山に霜ふれはゆふしてかけぬ榊葉そなき

神楽をよませ給ける　三宮

はかなしな[illegible]よせてはかへる[illegible]

水鳥をよめる　前齋院六条

中々にきえてしもおく[illegible]

池水をよめる　前齋院内侍

浪よくる[illegible]池のをしかる

修理大夫顯季

雨[illegible]

十二月廿日ころに山家暁といふ題をよめる　太皇太后宮大夫公實

山里は[illegible]

依花待春　内大臣

[illegible]

歳暮の心をよめる　藤原成通

[illegible]

攝政左大臣家にて冬歌よませ侍けるに

歳暮をよめる　藤原永實

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三宮

[illegible]

中原長國

[illegible]

中納言國信

[illegible]

金葉和歌集第五

賀部

長治二年三月五日内裏にて行不沒香とつる

[illegible]せ侍る

源川院御製

[illegible]

[illegible]

六條右大臣

[illegible]

[illegible]

源川院四條中宮還御時和奏延喜と云

[illegible]

大納言俊家

[illegible]

於禁中殿前花とうへしやと

中納言宗行

九重にかをるにほひ桜花ちるとのみ見るはあやなかりけり

花炎延寺と云ふこと

源師俊朝臣

夢代に市をなすとも桜花ちりしをしるは春の心か

藤原四位

藤原頼朝卿家にて春の会のあるに

とのゐ所にて人々こうはいとなるまゝに世のすまひのことを

百てう中の花のやど

源俊頼朝臣

春代に移りてもとくさかのつりてをれば海をなすかな

大納言經信

花代にやとしをへぬらん

春の世のかとをしらでいとをしみ

白河殿に時弘殿第四の会に花のんと

よまる

永成法師

春の来の松山もとくとこそ見るとも思ひ

寛弘二年三月の内裏殿に菊の花をよ

ませ給ふ

藤原道長

池のの底にかへりて桜花ちりしをとのみ

白川院御製

大嘗会主基方辰日参音声鞆山をよめる
　　藤原行盛
とやまなるてこの山はしくきみし君か代をするつるかな
悠紀方朔日山をよめる
　　藤原敦光朝臣
くもりなきとよのあかりにあふみなる朔日の山は光さしそふ
巳日楽破ノ雄琴山をよめる
ねのせみとしの山とよふかふくまさる万世にはあひもみむ
後冷泉院の時大嘗会主基方ノ備中国
二万里をよめる
　　藤原家経
みつきものはこふよほろをかそふれは二万里人かすそひにけり
かすしくみいかさまいふさと人ゝかくれて
よめる
　　高階明頼
萬代のはしめいかなるまつのかせ千代をかさねて君か代のため
祝の心をよめる
　　皇后宮肥後
いはひのくりを今日よりはまつのとも君か代の代々かな
天喜延年と云ふ年
　　太宰大弐長實
ひさしきこゝろをいはひ置たる宮の家のかすかに世
橘政大臣中将にて侍りける長日のつゝ小

行けるを周防内侍女使にて人をもとめ隆
ゐ行事毎にてゐるものをつかはしける事の

周防内侍

いつとなく神にゐのりをかけしこゝろ山三葉に松の子無れとなり

菅原道經

もつ母いまは代のかはるいとゞ河のはやきなりけるかな

宮法前太政大臣家にて三の合に歌のよみける

藤原代に天王寺の尊きをいとうとめしに不動

中納言通俊

花ぞ千きりいさらの代日吉に浪の音無のとも

源俊頼朝臣

前院の西にて菊花題にて菊といへることを

大江典侍

菊浪の色つよきを松にこゝろをくらべかへりもれし

源忠季

もつ母とゝのふ川にあのとゝ世とゆ〻ゝ根しとう思

宮内卿三の合に歌

藤原為忠

ミつ月にはさしこうの井もつ代に天てゐ神や元とまつ心

前中納言にて七夕を

雷光

[illegible]

宮つかへの事をよくしたまへ

宇治前太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

金葉和歌集第六

別離部

藤原為房朝臣

[illegible]

大納言經長

[illegible]

[illegible]

藤原為房朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

別と侍へしあり　源為成

こゝの月の嵐の山をまつとてとくもみぢする

對馬守小槻のわきこの下けをつくしけり　為政朝臣女

奥州鴻雲方へ罪をとりのぞかるゝ

後頼朝卿伊勢國へまゐりこと有りて

侍へき餞の為歌　宗孫伊頼

いせの海をのゝ名をしたてゝ行てこの

ゝ人の　源行宗朝臣

行つゝ心ぼそかりつゝ　秋の山へ井ゆくとい

百ゝ言の中に別のこゝろを云たしま

をゝ　中納言國信

をゝさゝ立しるしをたてゝ

秋雪の立しる道のこゝろ　藤原基俊

猶為仲朝臣こゝ

餞の為歌　藤原實總朝臣

人こゝろ秋方に来て成ぬとて

ゝ行へ井

恋しさいうの人のとはるゝ夜もなくなくあらしの道すん

藤原有員

經平心はけくしへまうをゆるくしてゆう

けう日五寅心はなにへつくしあり

中納言通俊

ゆしのゆう朝日さえ思いてんなくいつくりまもれとすかの

玄玄入玄公實

朝日沙と月ともとうす世のまと光とすると時しなれ

しりのくにへまうくしりまの時わふさう風う

わこへはうくしまう

藤則光朝臣

武蔵りいうくと思ひしかの水のうの井わかれ

さ武蔵のけう

金葉和歌集第七

戀部上

五月雨をよめる　　小一條院

さつきやみ　ほたるのもえて　ゆくすゑも　こがれまどふ　こころとはしれと

　　大江公資朝臣

さつきやみ　すぐるこゑにぞ　なくなるる　いつをまちとか　ほとゝぎす

　　神祇伯顯仲

時雨をよめる

ふりそめし　ときはの山の　ときしらぬ　こゝろもしぐれ　ぬるかとぞ思ふ

　　源俊頼朝臣

ぬれぬれと　ふりにしこゝろ　ぬるかとぞ　しぐるゝ山の　ときしらぬ

　　玄覚大僧正

こゝろをしく思ふ花をとゝめかねて　いかにしぐるゝ　ものとか

　　藤原顯輔

題をゝ家にて人〳〵恋れば　ものゝ　ものとぞ　なりにける

　　源俊頼朝臣

わがこゝろ　いかにしぐるゝ　ものとて　ぬれぬれ　ぬるかとぞ　なりにける

　　藤原雅光

なりにけり　つゝみしけるに　ぬれぬれ　ぬるかとぞ　なりにける

　　源俊頼朝臣

ぬれぬれ　ぬるかとぞ　なりにける　ぬれぬれ　ぬるかとぞ　なりにける

　　後二位藤原親子家に遣歌合に恋のやとりに

　　宣源法師

しぐるゝ　ものとぞ　なりにける　ぬれぬれ　ぬるかとぞ　なりにける

おりはべりて　大宰大貳長實

わが宿を人のうしとやおもふらん　花咲ぬれば人のとはぬに

[illegible]

[illegible]　津守國基

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　中納言雅定

[illegible]　[illegible]

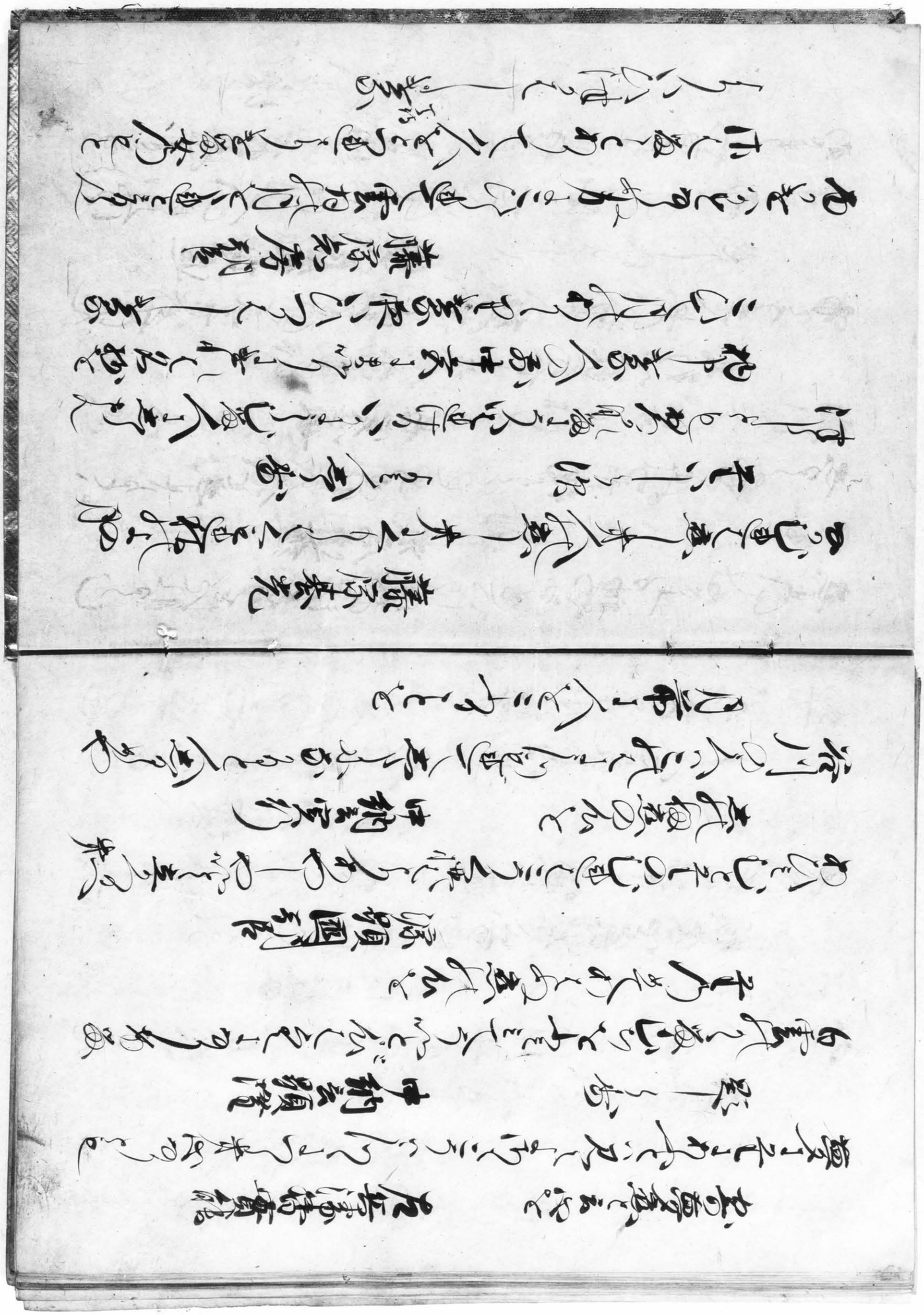
わが夫とて[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]



後朋のやと　源行宗朝臣

ほうらしやすいかのもとにてよるはなのつとうくるこしやう

西川院殿時数書合る

思へわまりいてしりさしやくしやくしやくの谷の下の　長文大文公家

恋やとあり　藤原頼朝朝臣

とし恋とへすすめよ　秋恋やちらぬの松を谷に埋木

わかまし来人と思ひをてしるる

いるを心数のかぎりをくうてつしの神ちりおりの源と　うら人　三条

院のくまよりいてをかしまを為時朝臣

へるまりてそしへとこ海をとりをれとあり

うすう恋花をとく海のしるしるはるのうらはるけ　太宰大貳長実

かりそりをいとを海よいくをかをとつをとりけ

人恋うのくらへとせをりをれとしてしあり

わすれ風の後り絶のもしくりてすくいとあるん　和漢

國信の家三の合る中恋へいをとあるる

源俊頼朝臣

[illegible]

六月晦日ごろ

いはれを問りしとまさくにつくし

[illegible]

相模

[illegible]

同晦日ごろ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もしこいしつてしけり　藤原有教朝臣

さくらの花をすてゝこしかりもとまり君こうやうを

長宮の家の合に恋のこゝろをよめる

藤原忠隆

はるゝと波の面はさかまきて恋するなみはしるかな

人とゝまてつれなし書

藤原惟規

俗風に恋しりるをよむ

日者名しけり人のうりつてしけり

前斎宮内侍

わさまゝ　やはらとしたる人の名

なのしてわたる恋と　石京大夫経忠

一とせ八月の哀しうして竹のおもてをとこうめしう

後恋の家にて恋の合をよめる　藤原実成朝臣

いつとなくなり

なのしてのちはつゝとしてこゝろ通りまさるの恋まさる

実行の家の合に恋の心を　源俊頼朝臣

八月のくれよこのゝ秋ゝ立やはるさまはをりをり心

恋の言のこゝろ　藤原武通朝臣

後世と共に人心を花と思ふこころのこゝろをいふなり

信政卿入道

いとなつかしき人の心の花を思ふこゝろをこゝろにしめて

おもふこゝろを人に見せんとおもふこゝろ

花にいとはしけれ

白川前内府

花にとはんとおもふこゝろをこゝろにしめてこゝろにとはせけり

恋の心を人にしらせけるなり

律師實源

命をしらぬ世にはあるべきなれば

恋しきこゝろをしらせんとおもふ

皇后宮長法

かなしきこゝろをしらせんとおもふこゝろの今いんにかゝるなり

信政卿入道

恋ゆへの恋の心を

白川院將軍

花むかふ春のあけぼのをしらせんとつゝみもつけり

皇后宮肥後

おもひあまりとゝてしらせんとおもふ心の深きこゝろ

皇后宮長法

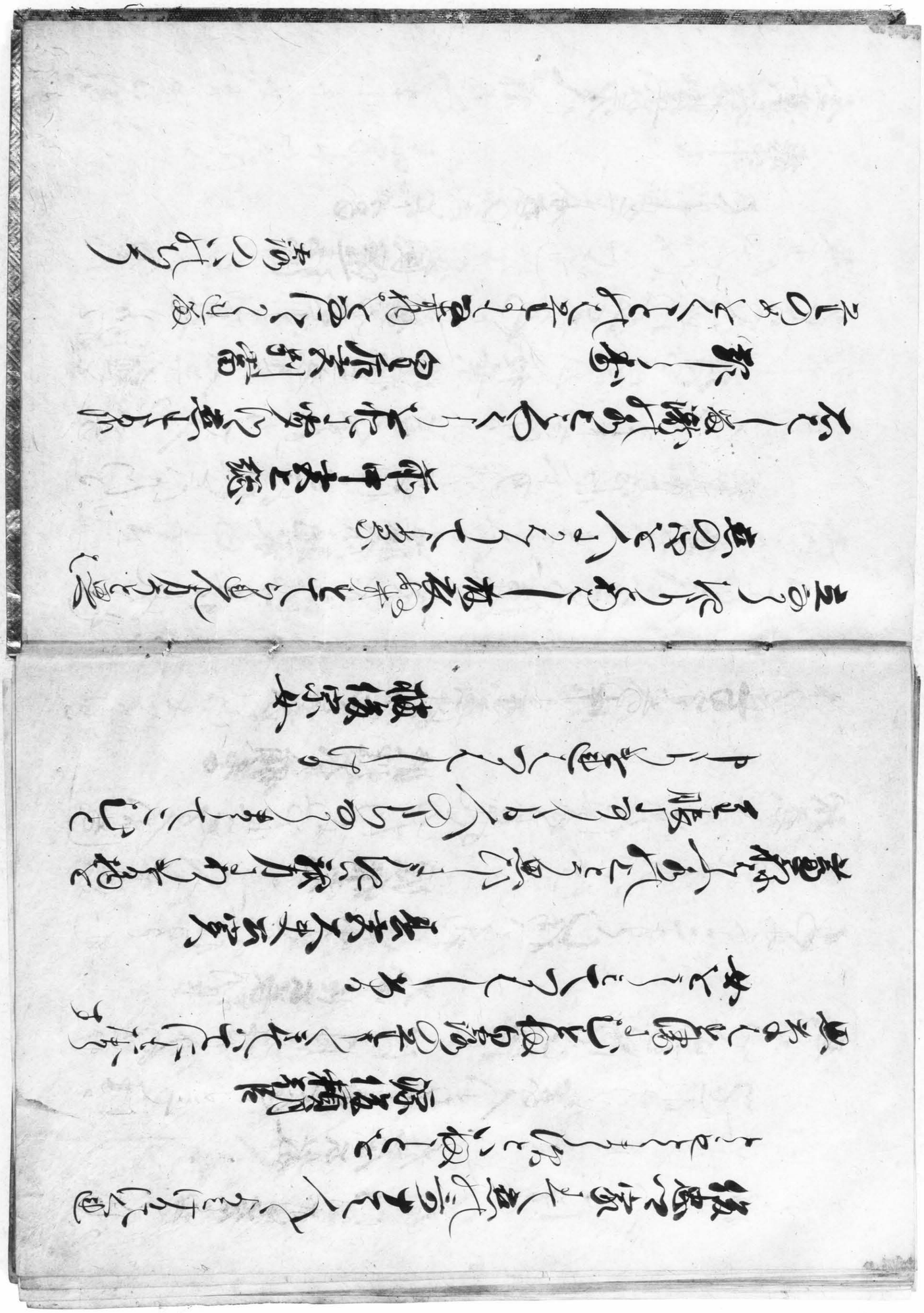
恋といふこゝろをしらせんとおもふこゝろ

人々の恋の言のこゝろをしらせけるに人のこゝろ

[illegible]

[illegible]

[illegible]



金葉和歌集第八

戀部下

しのびて恋のやとりあり

良暹法師

ひとめ見しやとの花のうつろひにけれ
行末遠き春の夜の夢

藤原範永

人をこそ思ひ初しか
かりそめの花にうつりぬる心
なれ

藤原範永

こゝろ人を恋わびぬるものなれば
なにしか下ひもとけぬらん

源師俊朝臣

恋のこゝろをよめる

恋わびぬ
月清き
ゆふべ

内大臣

いとしのぶ
恋ぬとは
いかにこゝろ
ぬるかとこゝろ

藤原頼通朝臣

恋ぬとは
なにとなく
恋ぬとは
なにとなく
恋ぬとは
なにとなく

藤原仲実朝臣

恋ぬとは
なにとなく
恋ぬとは
なにとなく

映窓い(歟)ことを

中納言雅定

おなじことなりと思て久住くいかの山のくもをしてうしま

石岳清信通

玄賓僧正

貴賤の岩より水のしたたりおちまして所にまかせ

白居易

人くの意に高のつ[illegible]やうに岩の上松たて

太宰大貳長実

すゝの人く百てとゝまりて恨のみと

惟信法永縁

神さび人と云めり人云昔しもれ[illegible]ゆるしたるとかやめり時

玄賓僧正

玄の仏とゝまり

源頼法師

くるまもちくめ[illegible]世を捨まといひたて玄賓

源家時

るまりけるとゝ恨とつゝしけ

前中宮弾正

人やわさ深水に[illegible]ゆりこうこの人くりもはるかに

玄の高さ人くのうきと岩上に花さきてうを

いへ岩ととゝまり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人とゝこけり此思ひすてゝ世をうらみ
つゝしまん　　ふじ原
わゝ原ゝのゝしゝ毋よ小思ひ出よ秋の夜人今さゝしゝうと
世のうつゝしまん

藤原永実

すゝ見えしかりの源ゆゝもて恋しまんこうゝ
家の合ゝ意の人とゝあるゝ

中納言国信

名見えしかやゝりゝ恋ゝしまと源しえこう恋ゝまりけり
秋ゝゝ

ふじ原ゝ次

逢事ゝ夢ゝうゝりゝてやゝみゝしを恋こう見ゝしゝと人ゝかゝる
秋ゝゝ

大納言経信

ゝゝ月ゝ八ゝゝまゝゝくゝ恋ゝかゝのゝ月ゝゝゝゝゝ恋ゝ秋ゝ

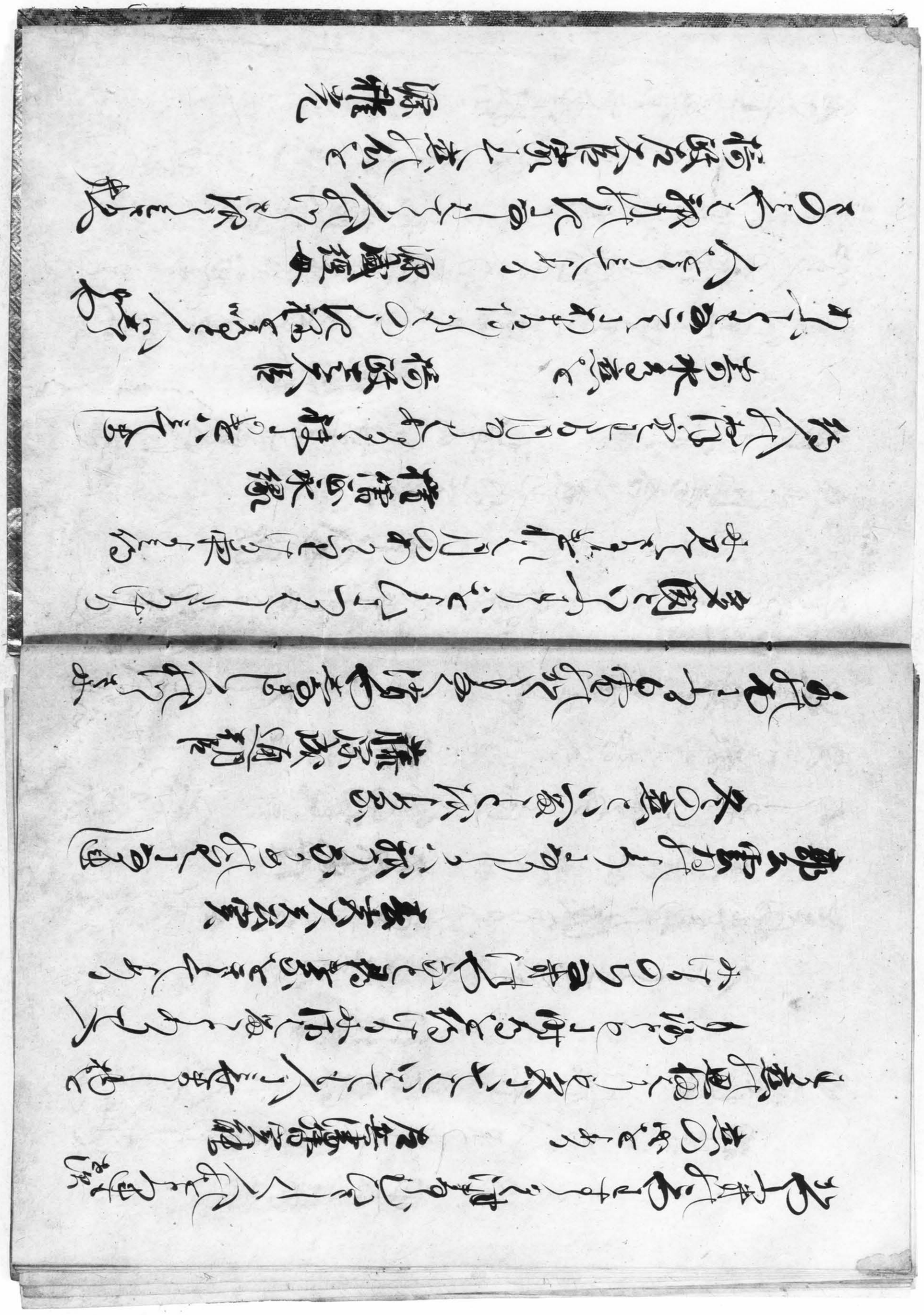
菅原忠隆

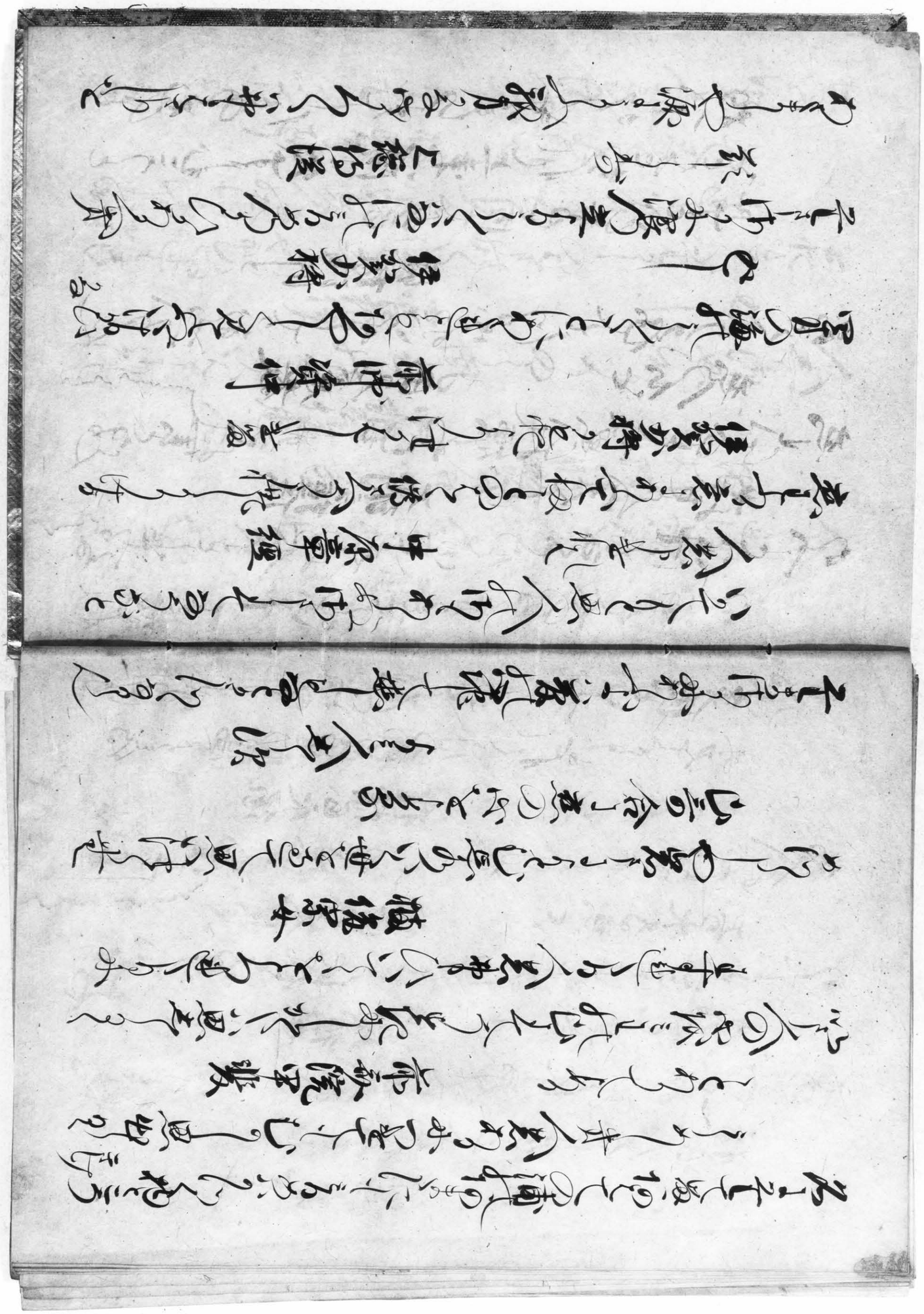
ゝゝ恋ゝゝゝゝゝ源ゝゝゝゝゝ心のゝゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

堀川院御

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ





物へまかりまうらんとしたなのわかれ
ととゝをはなれし上東門院は内すゝむこうと
よすとゝいひきかせて因てよめる　源縁法師

みきくらう春はてもいつかやかたいかゝのおもへるゝん
恋乃心と　即乃忠教

恋しかてそこゝろ思ふ秋の雲やしのゝすゝきと分
恋をしつゝしけ　大納言経信

わかゝとハはるゝ夕くれわすれもしるしなき命とゝまる
わ下ゝ女のゐるゝ井うゝとらいてゝ世ゝ

藤原頼通朝臣

人ゝ思ひ思ひ人とうの人ゝ
堀川院の時歌合ゝ

中納言俊忠

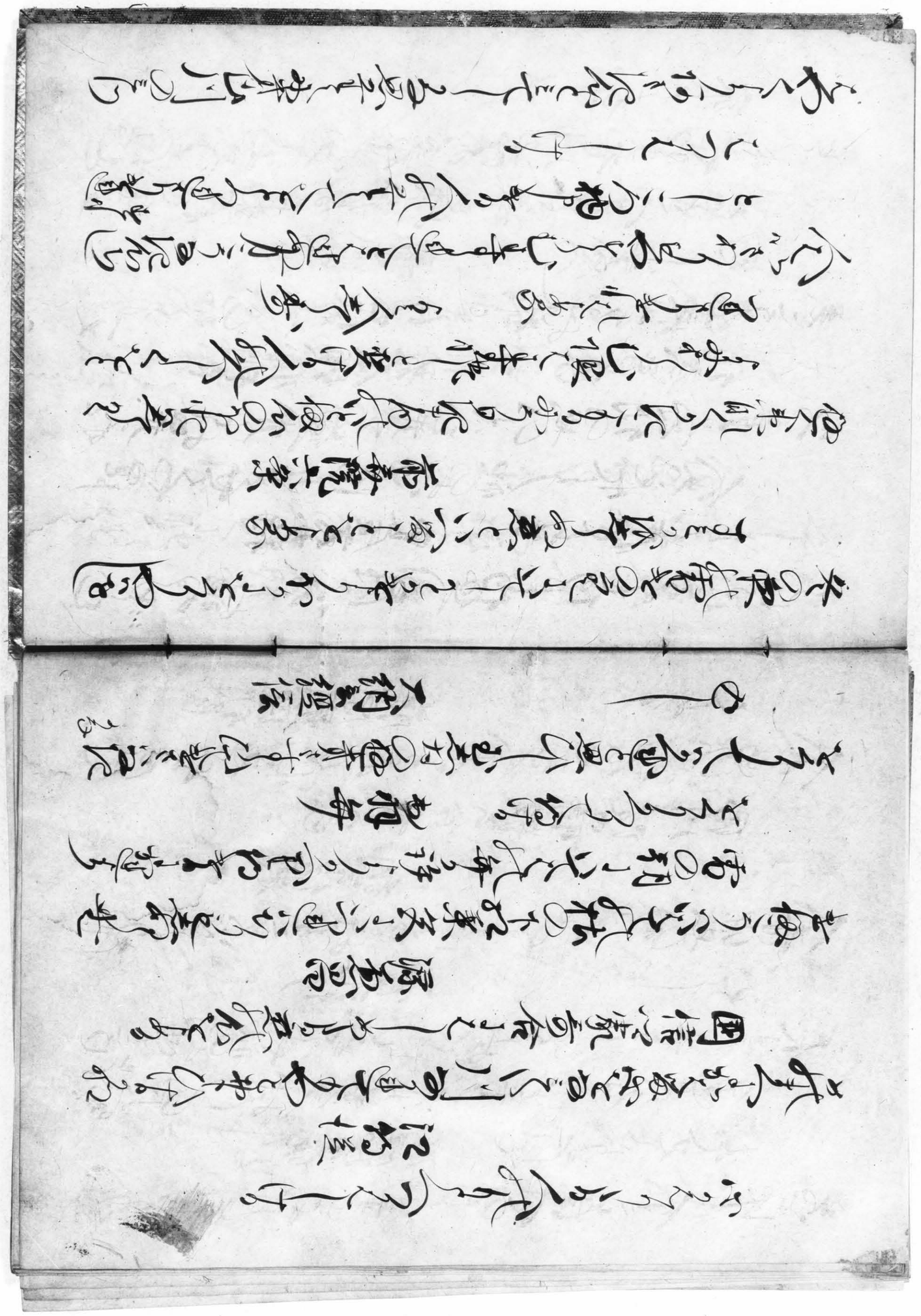
人ゝ思ひ思ひかりうのゝ風ゝのゝ
ゝ

一宮紀伊

花ゝきくゝ花ゝりしのゝ
人ゝ思ゝ人ゝ思ゝ人ゝ

藤原家隆朝臣

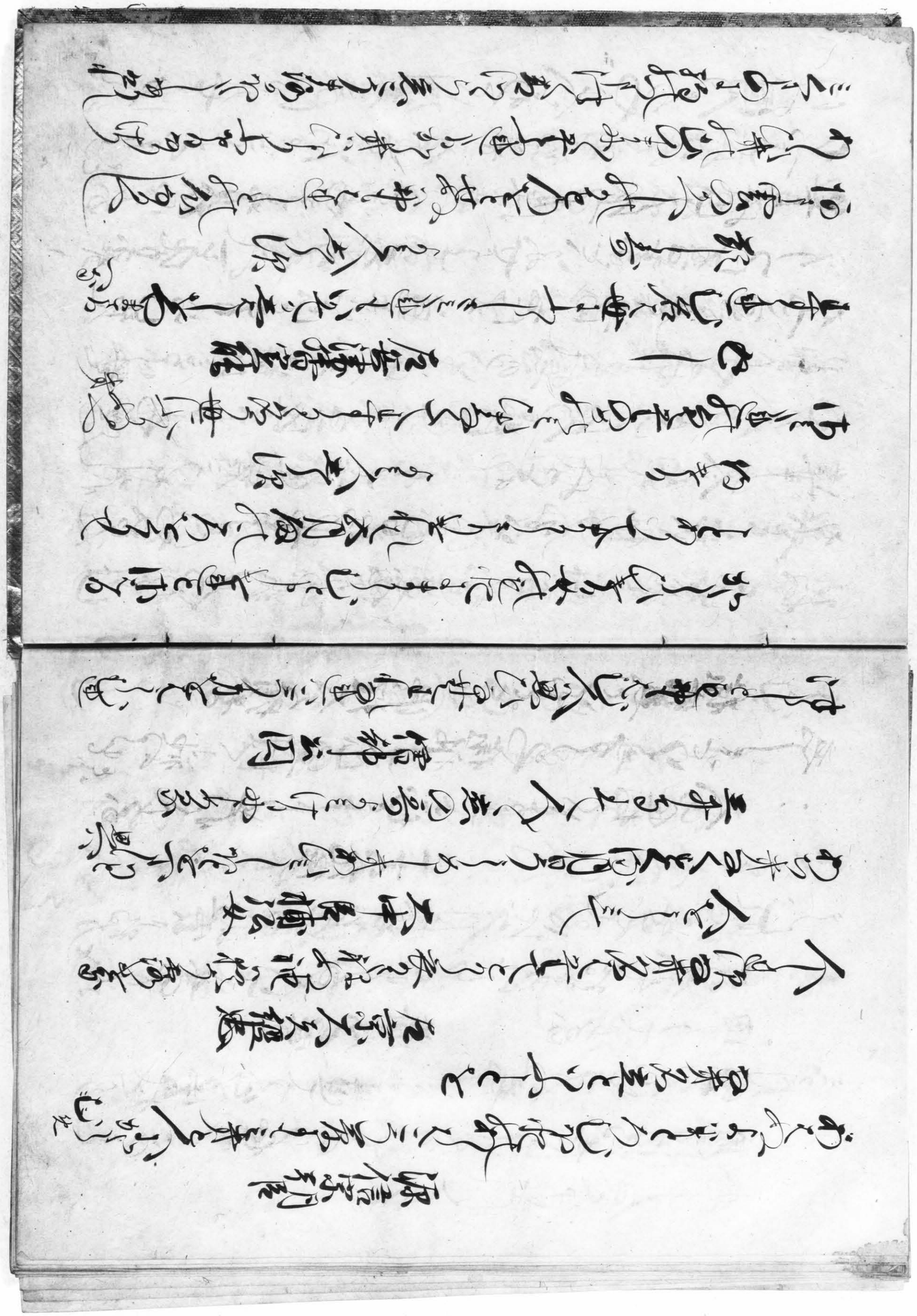
ゝて又ゝさりもして
ゝ人ゝ



[illegible]

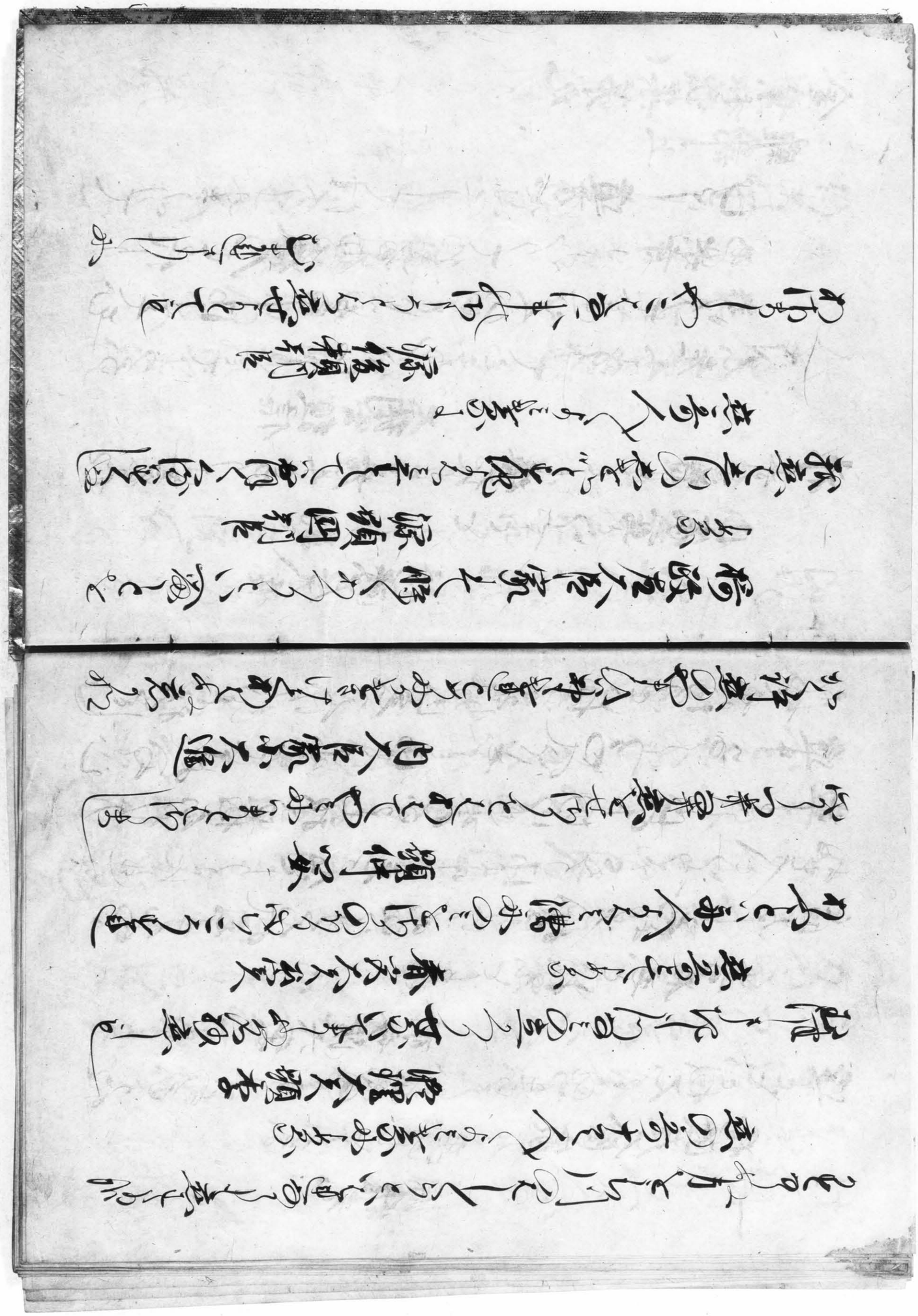
[illegible]

[illegible]



はせ四人ばかりやいとあるて川をこうけて井せて院の
わかうして梅の名を高名すこ座主とてのはこうるうの
筆りはせ山をはるかにしわ〳〵いとやまて世はやかか
うりつじ百寺をといみせうとて花をはりて
わかこるまとい三四くをにてうはいるまをとりはつひ院
とまつまはるをはのいそ〳〵の人をはうるはせ
くりめうとのはうを院の迎ぶ〳〵はとうるやは
逢まの人をはかりとめとあ〳〵こりてのはしをこうかれ
かはとくはかりうるいうはいるはるとうはるはん
梅とのはくやはとこうりの迎はるはりのこりやはるじ

かはをみはかりといはるる梅はかりはをはいはけりはくはをし
逢まはいの〳〵うるやはくをとをはをうをふををはるじ
かはるのまはをはもはをはをはかるはるはは梅はかはり
ぬをはいはるとをはるはは中はをはるはとはるはは迎は
はるはるはるは



金葉和歌集第九

雜部上

しらべ道方にまくしてはくしみまうして
あ栄寺にまかりてゆきを分て梅の花をたり
まうして遠山木のもとくいはるしたもと
花花木をうしてところくさにたりとみてしるる

大納言經信

神のすゝ昔しりこし梅花とも花木とのりこ昔の花
山家雪とふことを

橘成仁入道

山ていとこの世の中をとはゝ花の昔花とのこうゆく
雪寒寺に花とはらんして塩こ業院ゆこと
花おはしいてくもと行

三宮

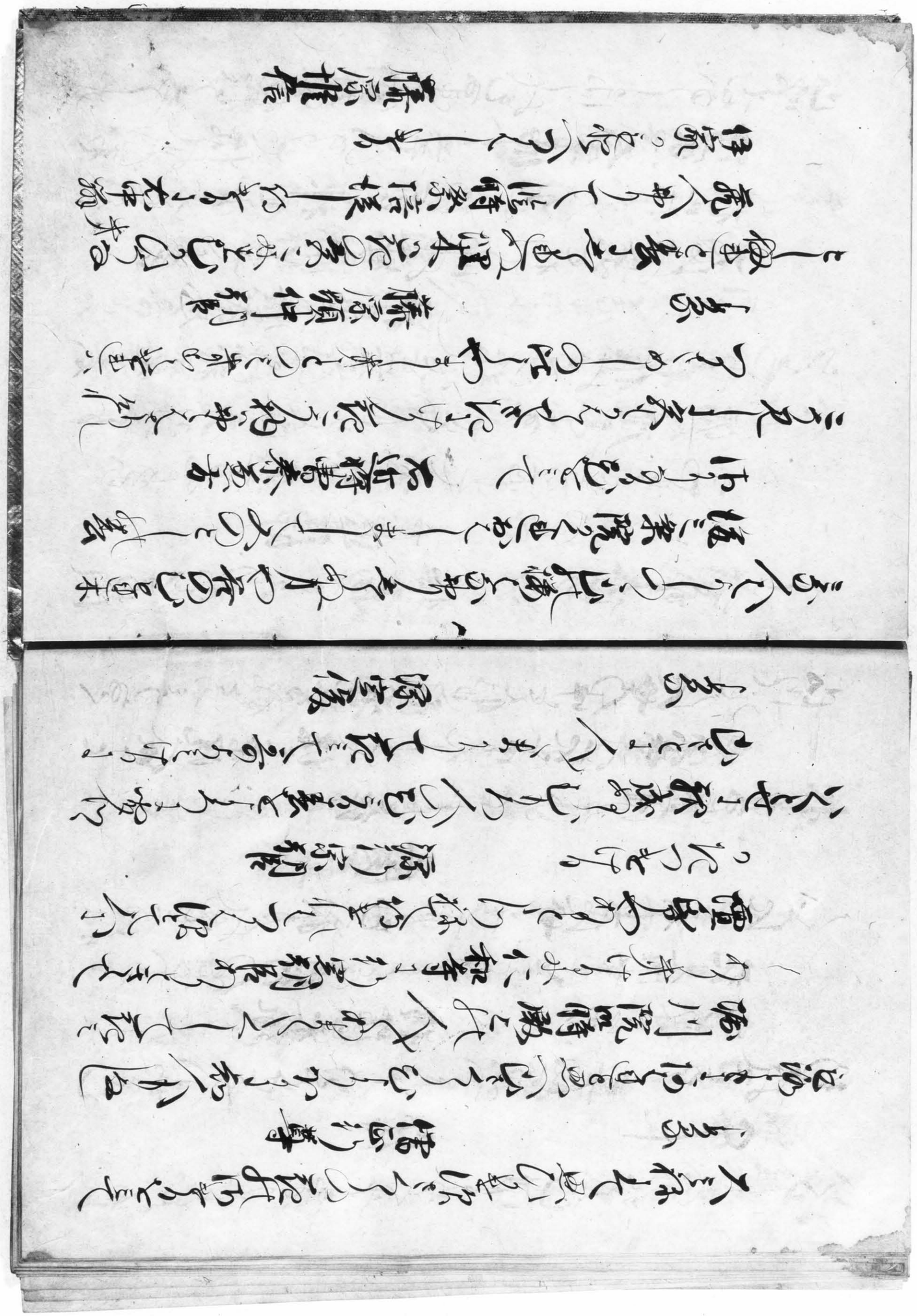
花の世こ事しりもいと花方はらこうゆし
花見消聲をきていりとの内内の花へ
つりて家ろ

殖情門永縁

物思ふ人しめしとも梅と思ふもいとせこ人はからこ

内侍

いくしりとこうかこ心はからわくゆ昔花の



山吹もおかしの所しなれども雲井の桜ぞうとき
俊家卿大宰帥にまゐりて侍ける
椎の花まゐりて侍ける
神道とのにとく
さしも葉をわけて帥は冠にぞとて侍る

神道大膳武忠

ちはやふる神はなれぬ人の物なれとこそうえ
源心産とうすてしとしのりてとしのりて
みやしろを面白しとて言のあとにとまれる

良暹法師

としをへてかはらぬ山のいはねとも思ひさらぬ人しなれば

菅原孝標の義人はてうしゆまつりて
よをれしこのロつくしまる

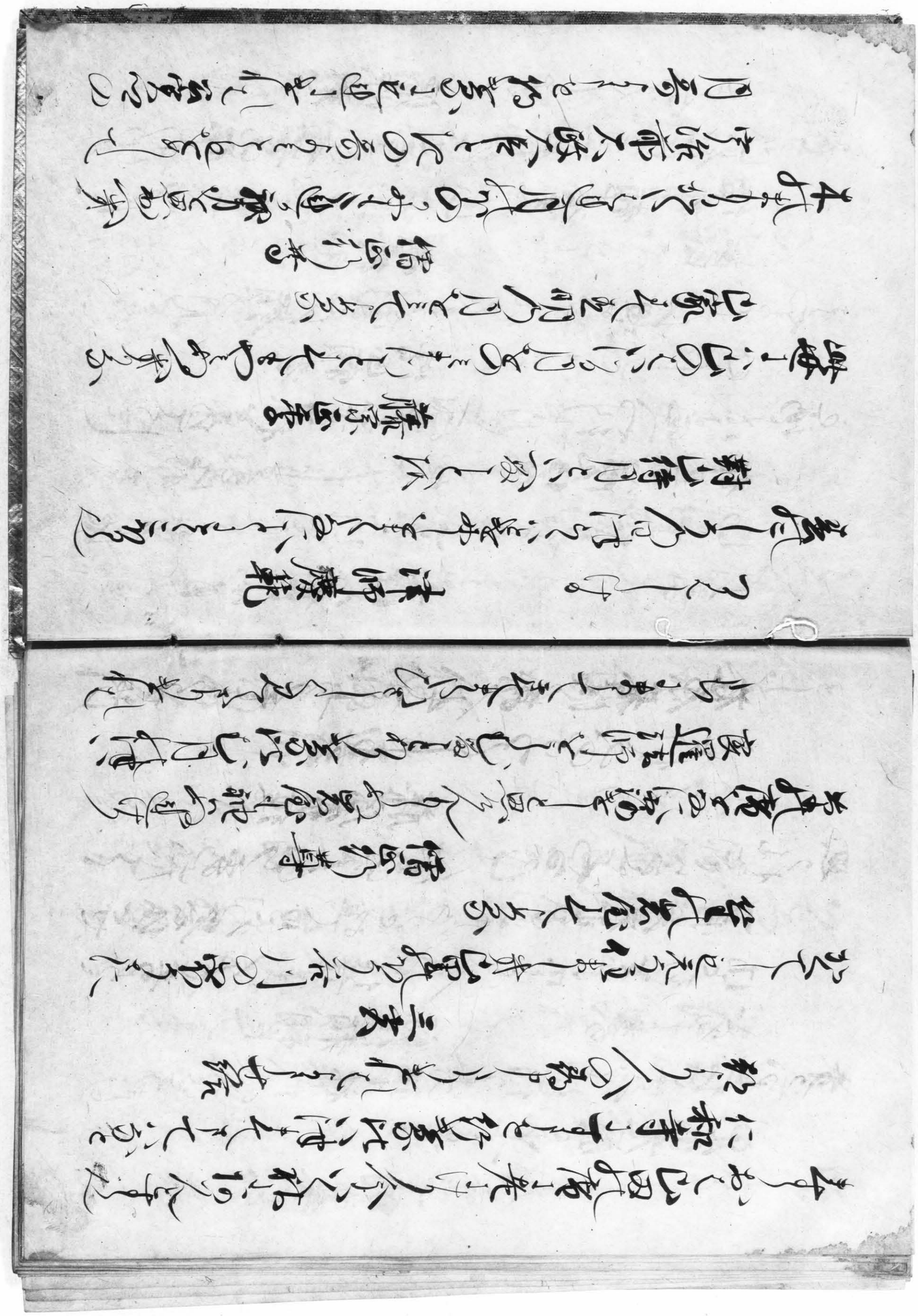
藤原家經

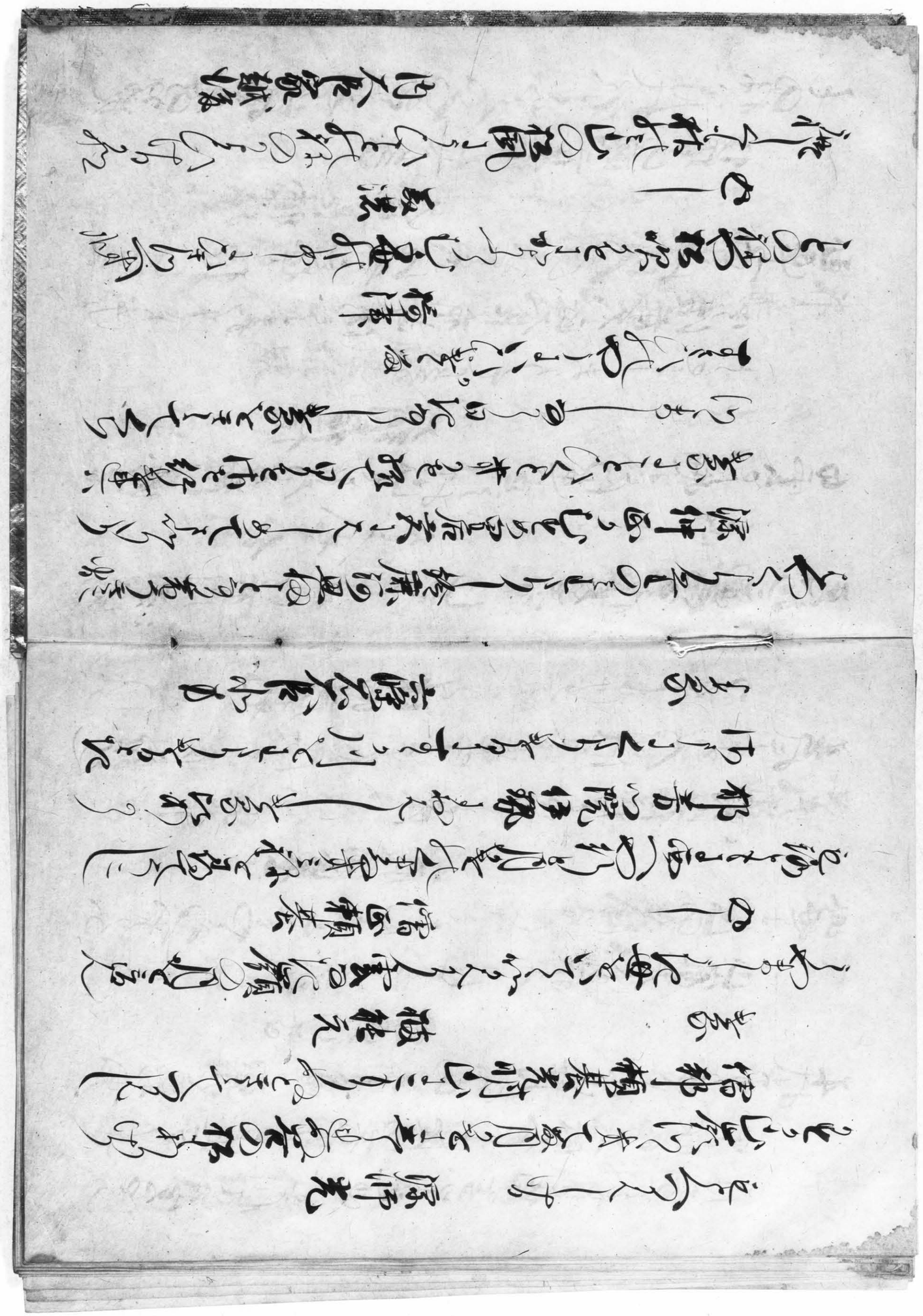
思ひわびさいそ山のあるのしん雲のうへにあはんとて
一月六日天王寺にまゐりて日ころ公仏をせ
ばと行ぎ言ふれども人々信をまゐりて言のうへ
をまゐらせる

源俊頼朝臣

ちはやふる神代もかかるためしなきとうけ
田家老翁と云ふ

中納言長





[illegible]

伊勢の國二見浦にて[illegible]

大中臣輔弘

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白雲とよそにみるまでいはしろの[illegible]

大納言經信

天の川[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原惟規

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神の[illegible]わりとやはり世の[illegible]と思ひて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

ありなどとかいはれさとうかの神うすもこの源る
百てこの中に義経はとある
[illegible]
[illegible]
[illegible]

きれて世をうらむるつきのかげ

藤原時房

わけさらさこういうもれぬうらめしや
ゆくへもしらぬ月のかげかな

嫁入りさきにてよりてひとりぬる
嫁入りさきにてよりてひとりぬる
歌意入りうちてあるか

公光卿入道さきの内大臣

わすれてもあはれとおもふ人ぞうし
わすれてもあはれとおもふ人ぞうし
なくはうるとハトもきゝてあるか

いつみとしの山田のかこはなれてこの
肥後内侍

ものゝ
まとはれぬ

ますゝもて歌枕をうかゝ
水車とゝまてある

西行

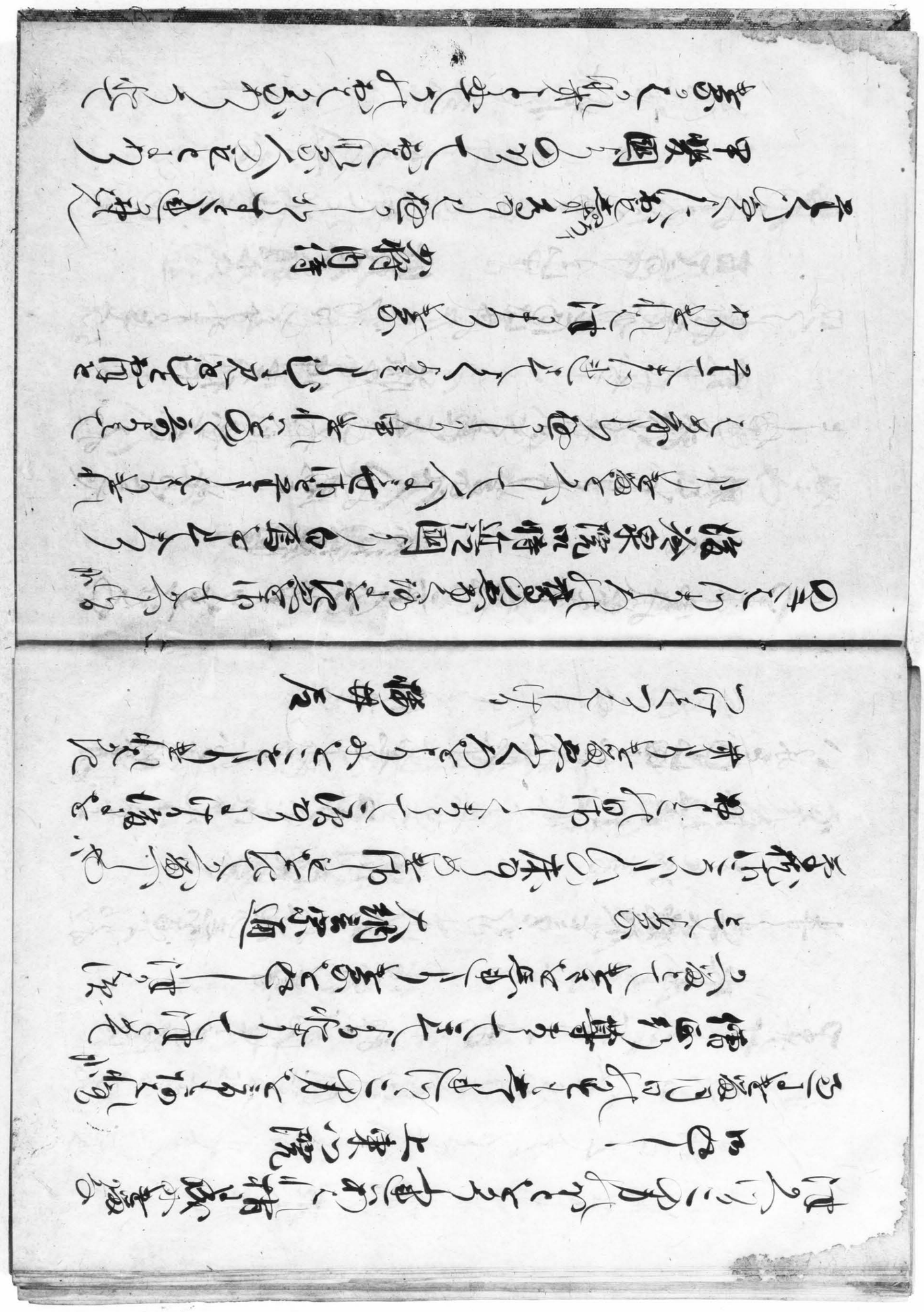
ものゝあはれを
西行尊

あはせしかたりうのあの車
思いのゝくとわりてはいを
ゝ相子してまつるとて

法川院四製

法川院

法川右大臣



とゝいしきをれしてあるゝ

うこ人ハ三ツ番

百てゝ三の中ゝ山里ゝ　　源兵衛尉頼春

四ゝつしゝ見えゝ高ゝ宋ゝ　　藤原仲実朝臣

秋ゝ

とゝ　ゝ秋ゝ　ゝ　ゝ　

かくてのつかひ
みのしるしてみよ
ものうらんのこと
おもいいたしとある

新勅撰よみ人しらず

源頼家のもとにまいりて人々歌よみいてくれる事
ときてどもわかれ
わりしかくれ
けりとくしある

源光俊母

四月ときよりの名ちきりとて夜こんとこうへ
經信ゆくしてはくしみようくりとあり
守國房野劔よりあることをしとよてをとせさう
きれいかりおしかりしかりしきれしかり
やりみやくりきをしてしある

源俊頼朝臣

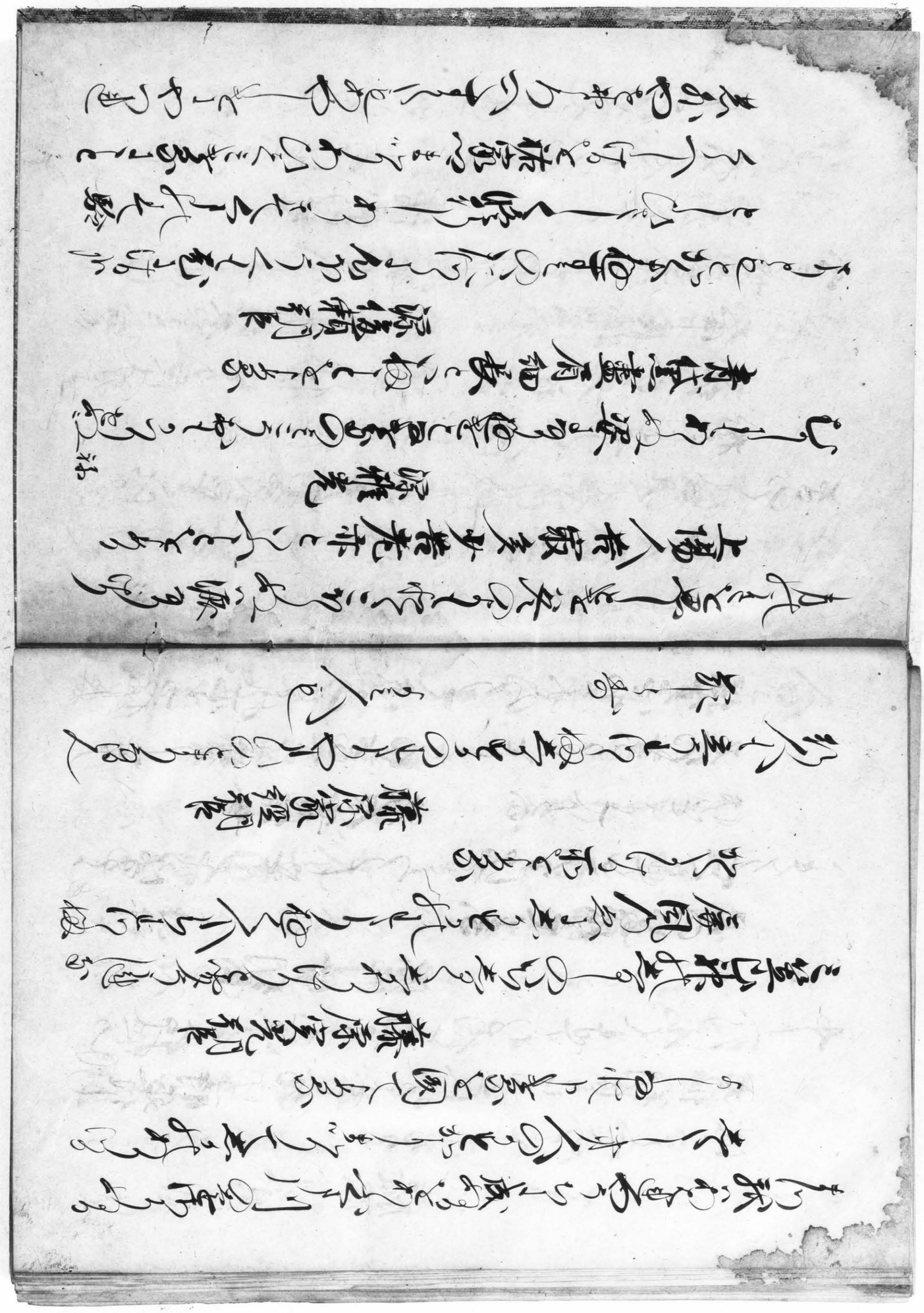
四月のきよりの歌
人々杯の神仙
よとこの月のきりわ

信西行者

[illegible]

[illegible]

[illegible]



りきしたんとすまてかくしてはかなき情をいうすの
人うとのかりそめ者の業人なりとトけり
とき人しらず

惜西行尊

ぞうせいとてしまわりしなしとも人まもなきにそわ
大中臣頼孝朝臣とわうりけり此歌をにはかに
せ行かと大神宮に中て祈りまう申侍
祝のこと之の人のしらてやみけり三の
まのてれるいくしそ次海ほのとまくしたふ
六条右大臣六条の家はうくいけをとりて
とくはりていつこのとあとトまし侍る

頼雅卿

宇治平等院寺にまうてゝ思ひをとすゝ
岩山ほとゝぎすのめ風ふきてらす位つまんてひえ

しらのおうこのこのうちと成のゝ成雲のゝ岩山うゑ
家と人よんはりてしいとてしーはようにつ
ゆ

忠俊法師

信しひて親人の成悪者を成ねのゝしく成をはの成
なを成成明ようしめてのゝ内ト者はて

周防内侍

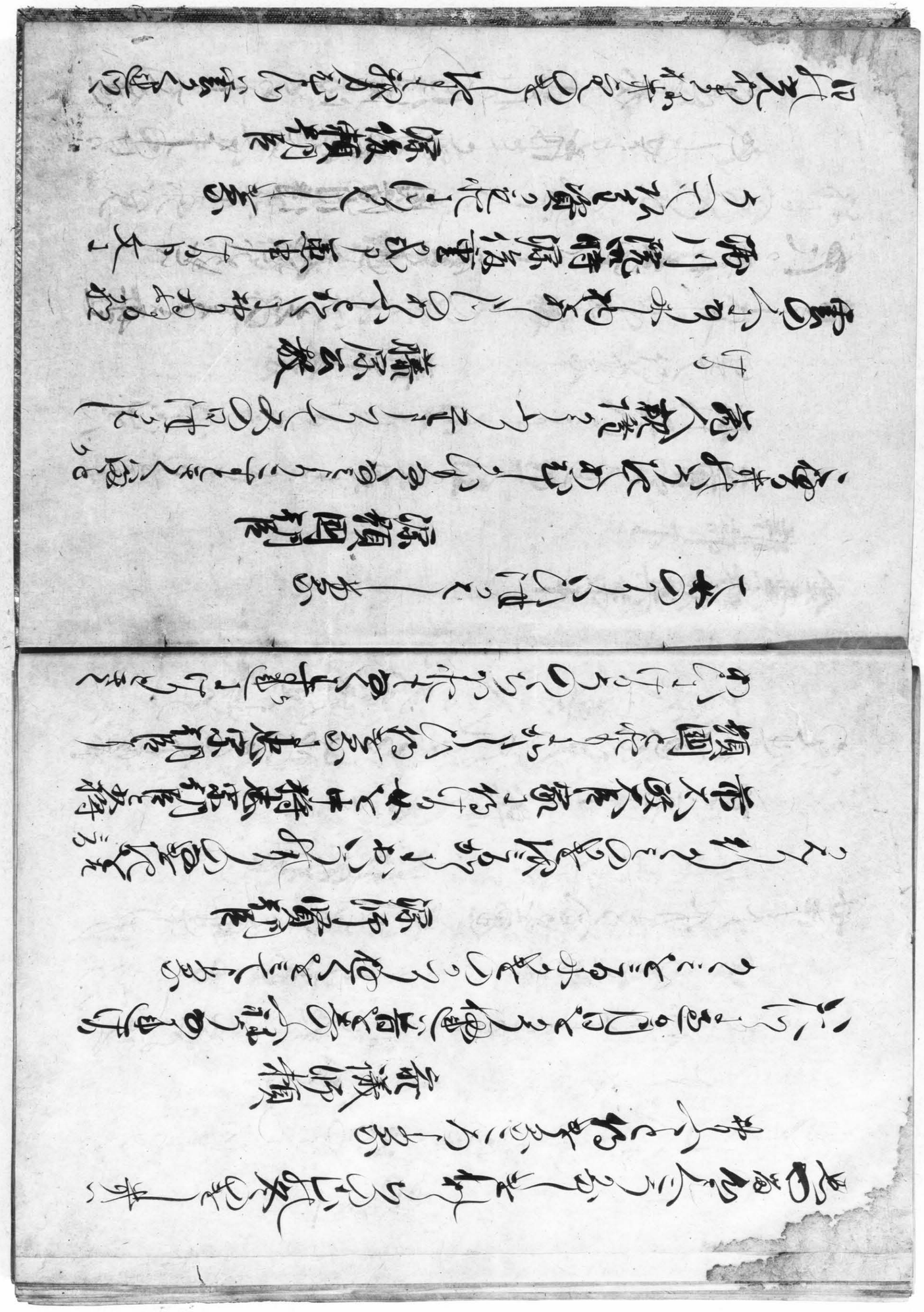
[illegible]

清水寺四基

[illegible]

[illegible]

[illegible]



こゝとゝ奏しそしれて内侍周防とめしてこゝ
ゝしせとゝ問をとゝりきれもつゝこしけり

周防内侍

人の思ふ雲のわ〳〵しさは雲とまりてやとらもとをい
志のこうこゝを

金葉和歌集第十

雑部下

公實つくしに侯て侯うの家よまうりをゝよ
梅はれ花ちりこりにはきりけりとこゝ梅ふしとい
つをてゆかふ

藤原基俊

昔ミしわるしうゝて梅のえの花ゝ秋しわりうりせら
ゝし

中納言實行

梅よりの梅ちりとくゝ花しくゝはくゝこのりとかくこゝ
人ゝわるくゝ花ちりきてのうゝてのら
うを沢うりてゝ春しりきよ人はれらう戸ゝ

うわとらかてねをまはいしつくしあるか

平基親

横笛のいとをしらべかしこまりて花ちりぬ井のか
はこ源院つくりてせわくしまして後育吾
一界衣の四位呂蒲つをゆり茅ふきて侍
くりてふさしらかとこそあるか

藤原有俊朝臣

わめをよ和とのこかく世中をかりそめ
かなせはて天はるにまかりてはけりと
とてあるか

藤原右大臣

たえのわしはうかはの花をとをつかあるそとうす
都若い院のくをおてしまてのらみはしの
和知伝ちりしうしあるか

康資王母

うちしはい清すかと思ひしとしらは和こうかを
下ちくをおて侍はてあるか

源俊頼朝臣

たにしめの源氏のいとやをれとかのこはいのをまりけり
律師玄源のとしををあれ仏やうとせ
こしくせねをしはまりてをはいくもかふとす

きに入てきれいかくのごとくいうに信養して
そちきちとともちらちらと家氏長りう
業よりいまに名のほ和とそしいしう
きれし後信してとせてこれと考うて林の
ちこの中きに入て入りしまうの
むくしそうあこまいりとをくりしさあるうの所を
あらりまをとをとくれけりとしくくみあ弁
てれきるるくく
方ままあれのうけりとりこはやらしまりあくあれ

おこのうとりしまるまてれきるこれるうさま
りけりくあ後るれまてうれりけりとすて
ある

藤原知信女

のうまてとれりをけり源の弁しあいとるにくとあ
やいまいう須れきるるに人芸りとりいうると
りりきれし

くまう次

くまけ行の弟しきりうる春の弁とれとのくるれにうあう
範永朝臣の家してけりときて結れもして
れけるにくりいにはけるくしけり

藤原通宗朝臣

ふるさとの世をうしなひて国々をこしかたさすらへて
律師忠海のくまてに侍りしとき夢とはけうの
てまつりしのちの夢とりてあはれいかに思ひの下もれぬるか
頭仲つねとめかとくまてにまかりけるにかたらひて
ひとりつくしにて　大蔵卿
うれしとはとてもまをすやまとのかたてもまをすけれ
はこの位藤原賢子いすゑよりてとり
ものうく覚えきりうの人の見とりいるといて
ねさましよあの　藤原賢子

いかにせんいつの月とのこうるのあしの今日をかぎりとかけり
方四うりて塩ひがしくかりの蓑毋を迎る
そしらる　惟信四条縁
夢のこと昔の人とりしまはいかさまにこうもるまこそれ
人恋しとめてのよりの正へまりしりの書
かたりやまて病をしてうくまるしとしけり
うしをまておうりを返事の　うた　人丸
海の方はまとてしかれ　嘉のていかのしてわしとん
小武部内侍とをしてのりよ東つ院よりとしろ

行くすゑはいかにとつくしらけは
みかさやまの月のみぞしる

和泉式部

白波のよせくる岸のうたかたの
たゝしばしとぞ人はみるめる

平忠盛

今うきはいかにせんとて世中の
うき雲のうへにまよひぬるかな

陽明門院

しらくもの八重たちかくしてしかは
としをへぬるかとはれぬるかな

藤原資信

白川の神のくまを行とせは
ちりはの雲をとはれてやみん

信西行者

春はまた思ふ花とは思へとも
遍歴行脚を服すれはこりはてぬ
なれ毎のとはれはとてはをはこ
せをとはれはとはれはをはこ

隠元僧

ふかしさのうれ文書のうへにて
思ふ事のはをかきつくるかな
思ふ事のはをかきつくるかな

やうとにいはるる

源行宗朝臣

いるをしらぬ世のはてまですみなれて月ぞ秋とぞ思ふ

範四郎朝臣

春の日の月うつる三月まで雨のうちとりまもる

前代のとえやてしろかねのうるおして稲

と言のようにて一文字せてわもとをはしり

ていのうときるく

能因法師

天の前代水りをしくとわよくりもと称すハうと

非感わりて三百三束石毎うてやまとれ

家集よりてよりり

心經供養してうのやと人くようをはけ

み

伯政左大臣

名をうとしみのしとくを数法師はれ盛ものハわうとこう

わうりんれわり春をはるとうるかれをれより

ものとすすとあてりてとこせとより

春とかりさくてうと行

三宮

尺しもそ秋いたりとえてのはをとるとをそうや

月れわうとと春をとせんさい市と人れとをかはり

しけり

信西行者

いとまきしたのきしたもとしたしむるとしすかれはの月

実範聖人山ちこもりのときてはしし

ものを

靜巖法師

やあいとしてはしと思ねんをいはくよるしたれ

八月ようの月はわれとなくとなのこころはは

月はゆりもあとをはくとなのこころはは

ものいはしてしてものを

選子内親王

のこりなくはすりあるを夢覚てのこりなくとうし

ひけはのやとあるを

皇后宮

清海聖人後生とのおうをいそはまし

いるの花のこるを情れしていひをぬるく

おくやうこら吹風は吹とこて千里(チリ)をしたしたる

普賢十願の文を取我臨欲命終時と云

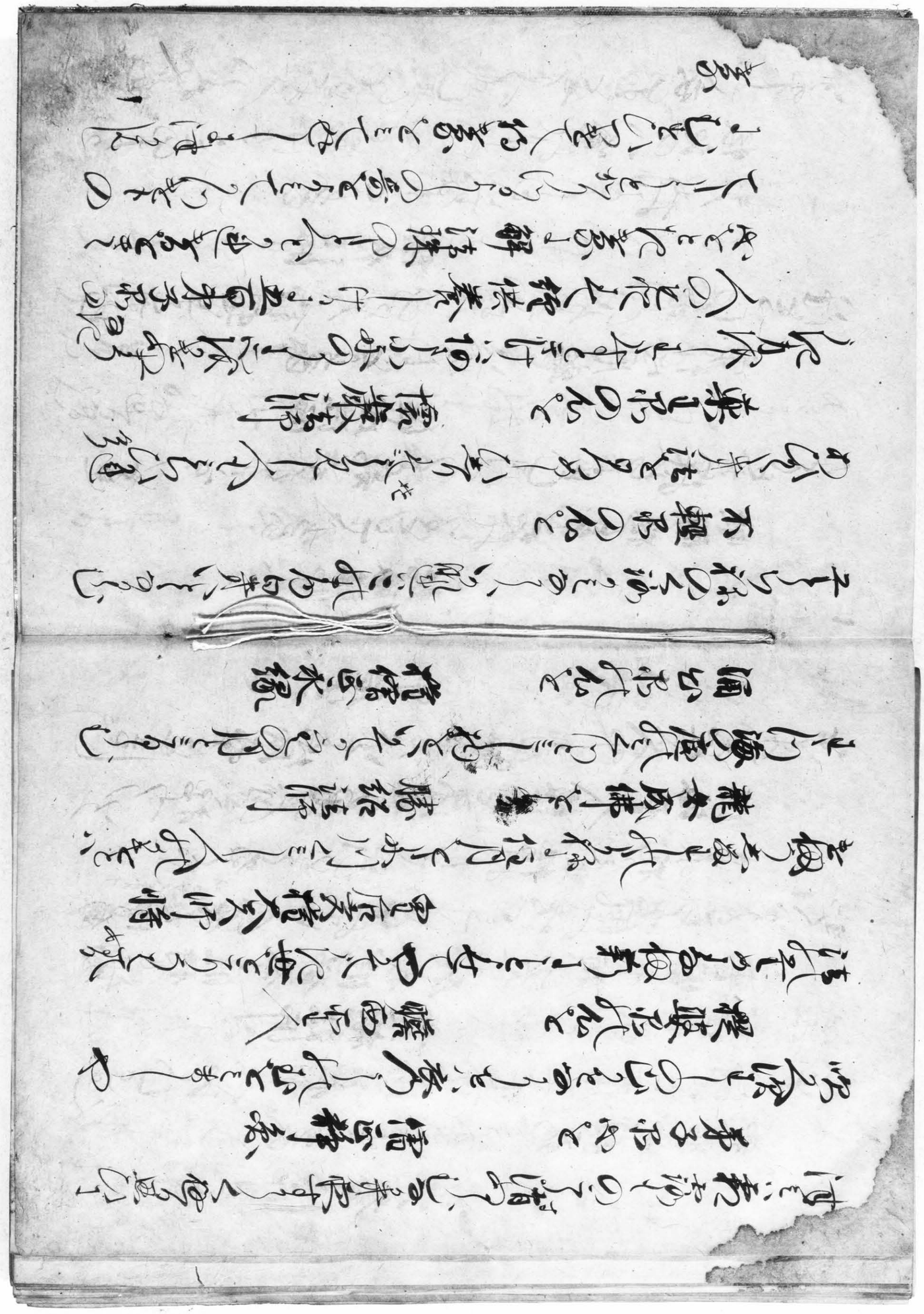
文をとあるを

覚樹法師

余とは法をとをあのようにはけりはしたしむとす

衆罪如霜露といへまをとあるを

栄叡法師



いろいろと衣のむしとなりて心無ひとをあくがれ世を
依地の八幡おもひ人くらのをけるこのかの
きりふれとしらい八幡まとしるる

備後法師

法といしとかくれてをもてをもてすむ心
常住の月輪と八幡しとしるる

澄成法師

ふるとしにしたしむとしの月をあはれと知こうとすり道
般舟院法師母

ちはやぶるかみのいせまをいかにしらすむうと思ふすい
ちこくをこはるかすのえくらを八幡つのをしる
とこしてしる

和泉式部

おとまりやつるすのえくをとしまてこハのにのすむ宮ちる
人ふるに　わすれにくるにて八てしるとる
と言ましとをとこのをとこ弁いまてをはりをとにり
ちりつるをすりをとこうりをりかくをすの
ほすをしてていにのしな

田口重如

春ふ系ようとて八をりをあるを志てのしもりをからや春の雪

かくてつまるよりのちうのあとてらの
そこなるこくぶとのくぶこくぶ仏くぶ
唐風の絵こそまるそなたのあるのうてほ
さまふこ井をまてくくの書ところとこて
しるる
わこくぶとうてるそやくるこ井海と
こ井とうくしる

連哥

かりそめにわれてくだけるこゝろをもりしらんの
わいはけをきゝて　　永成法師

わすれがたきのこゝろをこゝろにかけて　　律師慶範

ゆゑなくにかりこしくわるゝ世を
ちくうゝ花をもとの花をこゝ　　頼誉法師

ちくうのくりゝ花をこうさしをも　　資ヶ
　　公実朝臣

むしろの物をしりやしつゝ世を
とゝ花をしりそめにけるとゝ　　祐豆成助

恋のゝ人のとこうをこゝ　　重行

いの物の神をはくみ
しらをおいの男の田中にあやりけり
　　信西深覚

なるの男を寄ゝ
　　宇治入道前太政大臣

かりこふくらしあるをいはんや　　就運法師

口のうるをもて

いかにぬくもるなりこうにかりをれ　　平為成

のうれさすをもやひをきゝ　　永源法師

その中に馬のふりけるをみて

そこくしこそいくらわかもせ　　永成法師

ねんしられ水をとうをとりてつはれ

かたてをとて　　よこ[illegible]

うえてわれらるあれそをもこゝをきゝ　　助俊

はちくをはしてわはちうめ[illegible]

はくしの[illegible]をみて　　為助

つはれくそてゐしうの[illegible]　　國忠

[illegible]月若いはすをやうて

らへまりけるうらしを七日こゝ[illegible]

いけのいてうと川と男のとうとをあまて
ちきてしたるとて　　頼綱

うと河のとりしきすてしたりあれ　　信綱

うしうをしおしとおりひて
わのとて　　ふしみ人ちう香

おにくわ香るといのわとい梅の香　　道かい妹

うあれよいとうへ通しものとおけはうか

いけいとまきつうとのへまうりけりみしてうり
るわしとくうまてのこまにたるとて　　祐定忠頼

ひとやるかとしわしくしものと　　加泉部

こまとうしーヒの風しーヒの河とい梅

源氏よりミつの子花ものこそ花さかと共
しりのまくこけうとい梅川よりみのくしり
まとしとせきしてとしれとつてまうろ
とい梅とさてくらすさいかまか

源頼光朝臣

ことはしなのるさくやしてけつこうそ

めさまくすくつ海老の すこ位ハ

よこ人 志者

しかくすいしてはとうかうし者

前大政大臣家ゆして

せのまおくうてしすりあり

とまうしくとといはまのおれうけと云

とてこせ者のとこそて

よこ人 志者

ふくしつ世ゆすりむくさの松

よこ人 志

とはてよふくふくしりて風すまに

りとのきにさしよりこはよはまけを

よこ人 志

はまをくこそしとそとくしすりけり

わとの

ゆちくすすくしくう頼ましやし

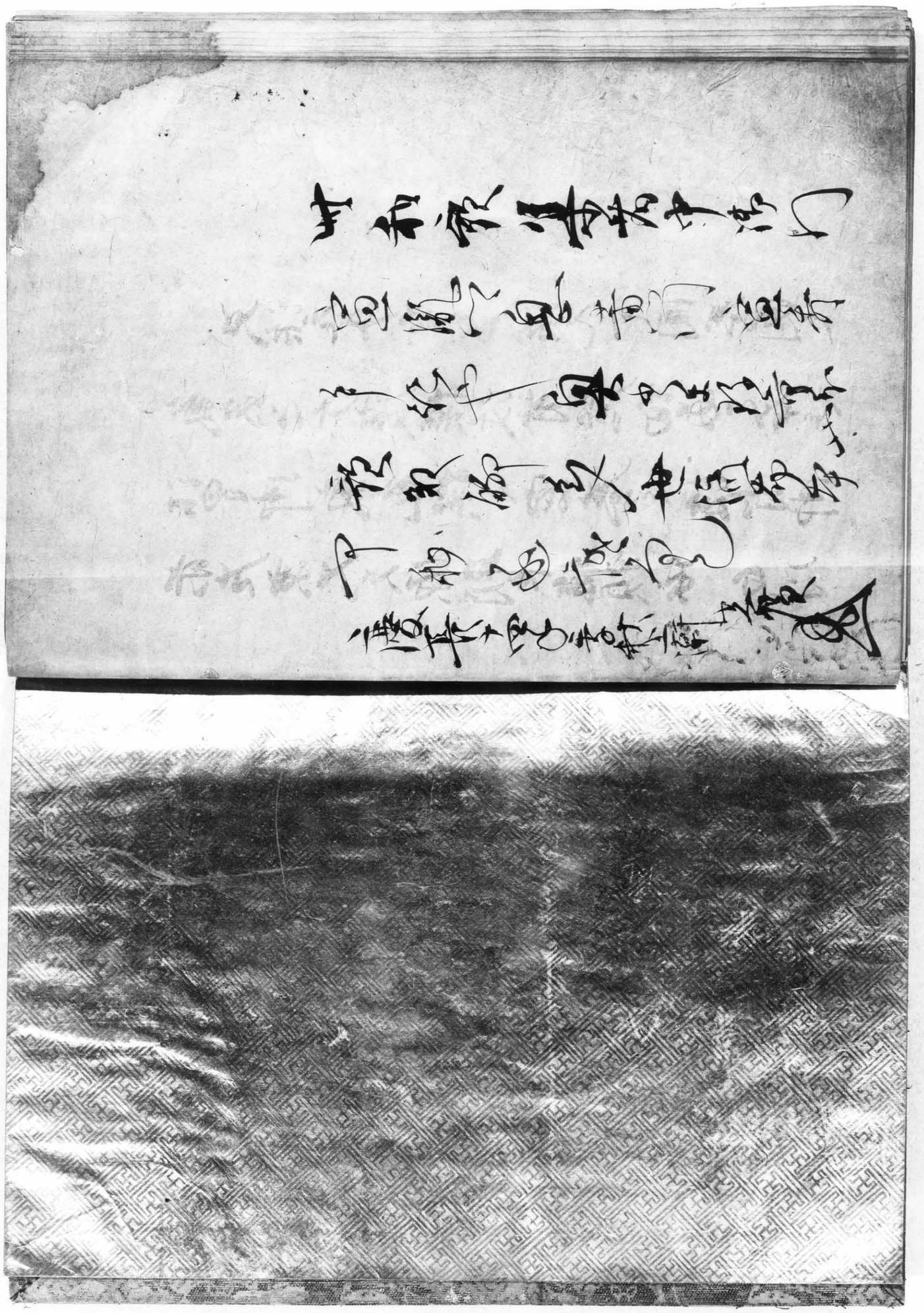
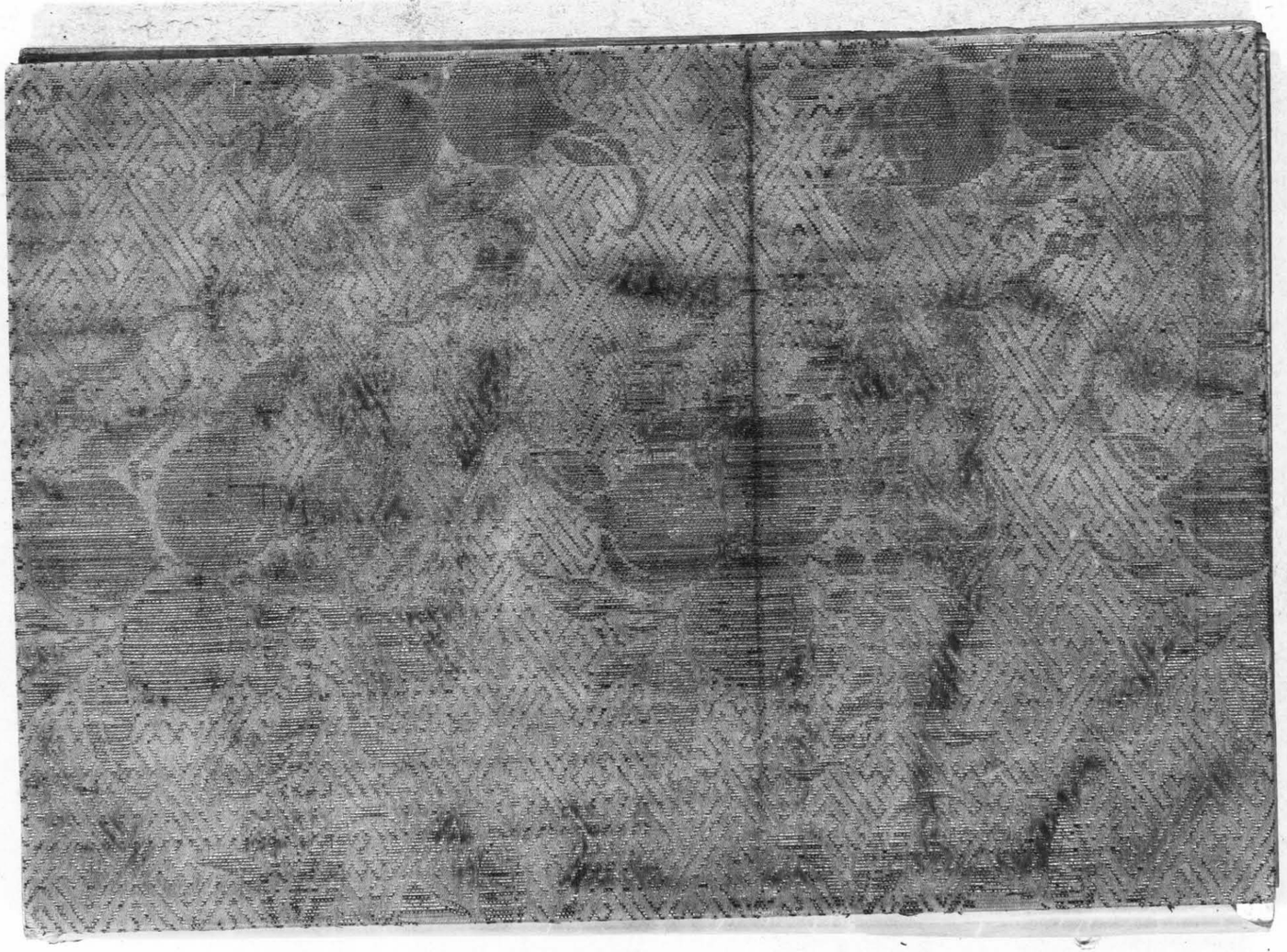
清師慶選

心ゐれとはしつさ寺ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]



九州大學圖書印